

清代嘉慶・道光年間における「東三省」の語とその用例・用法

——19世紀前半の清朝の対マンチュリア認識の特徴にも触れながら——

古市 大輔

はじめに

本稿は、前稿¹における分析と考察を踏まえつつ、対象とする時期を19世紀前半の嘉慶・道光年間に置き、主として『清実録』における「東三省」の語の用例・用法を紹介・整理しながら、その語義の特徴について初歩的な検討を試みようとするものである。

本論に入る前に、前稿での検討内容とそこから導かれた結論をまず紹介しておこう。

前稿では、「東三省」の語の用例・用法とそれに関わるであろう18世紀のマンチュリアに対する清朝の認識のありようについて些かの検討を試みた。そして、その検討からは、(1)「東三省」の語は総体的にみれば18世紀の時点では地域呼称としては多用されておらず、この点に鑑みれば、マンチュリア全体を一体的かつ領域的に捉える認識は、清朝においては18世紀にはまだ希薄であったと考えられること、(2)ただ、18世紀後半以降の時期になると、「東三省」の語は、清朝にとっての重要性・特殊性を強調する文脈の中で地域としてのマンチュリアを表現する語としても用いられ始めており、この点に鑑みれば、清朝は、マンチュリアを清朝にとっての重要性・特殊性を有する地域として、また、他の地域と明確に区別される特殊地域として認識しつつあったと考えられること、の2点を確認することができた。

また、これに加え、「東三省」の語の用例・用法や、その用法に表現される清朝の認識に対する検討を行うべき研究的な課題としては、以下の2点を提示しておいた。

第1に、「東三省」の語が、清朝にとっての重要性・特殊性を強調する文脈の中で多用されたということは、その「東三省」の語がマンチュリアにおける「漢化」「内地化」という歴史的過程とは直接的な関連を有していなかったことを示しており、したがって、「東三省」の語が必ずしもマンチュリアの「漢化」「内地化」という歴史の流れだけを直接的に反映した語ではなかったという点である。また、第2に、清朝のマンチュリアに対する特殊な認識が「東三省」の語を以て表現されていたそのことは、清朝の対マンチュリア認識のありようや変化を検討するための題材として位置づけ得ただけではなく、「東三省」の語の中の「省」という語とその意味内容それ自体をどのように捉えるべきか、また、「省」の語のマンチュリアへの導入の過程を如何なる歴史の反映として捉えるべきか、といった清代史上あるいは中国史上の「省」という概念に対する再検討のための題材にもなり得るという点である。漢人世界における政治制度を象徴する語として通常考えられてきた「省」の語が漢人世界の基本的な統治原理とは異なる統治体制の敷かれたマンチュリアで用いられるようになったことの意味や、清朝が「省」の語をマンチュリアに導入することを殆ど問題視しなかったばかりか、マンチュリアの地域的特殊性をむしろ強調する文脈の中で清朝自らがその語を使用するようになったことの意味など、「省」という概念に関する再検討の余地もまだ多く残っているように思われる。

以上が、前稿で提示した結論とその結論から派生する論点・課題であるが、では、そうした「東三省」の語の用例・用法とそれに関わる清朝の対マンチュリア認識は、その後の19世紀にはいかなる特徴を呈したのであろうか。本稿では、上述のような前稿での議論に基づきながら、「東三省」の語の用例・用法

をめぐる 18 世紀と 19 世紀との時期的比較という側面も織り交ぜつつ、19 世紀以降における「東三省」の語の用例・用法とその特徴・傾向について検討していきたい。

具体的には、18 世紀と 19 世紀のそれぞれの「東三省」の語の用例・用法の比較を行う必要があるため、前稿と同様の方法で検討を進めることとし、その上で、19 世紀における「東三省」の語の用例・用法が如何なる特徴・傾向を帯びていたのか、あるいはそれが時期を下るにつれて変化していくのかどうか、といった課題に対する解答を試みるべく議論を展開していくことにする²。

ただ、検討すべき記事が甚だ多いため、本稿ではさしあたり、検討対象とする時期を 19 世紀前半の嘉慶・道光年間に限定し、また、採りあげる語についても、マンチュリアに関わりを持つ他の地域呼称の用例・用法を全て網羅することせず、「東三省」の語とその語と類似する“盛京(あるいは奉天)・吉林・黒龍江の 3 つの語が並記されている語句”の用例・用法に限っておく。19 世紀後半以降の「東三省」の語の用例・用法や、19 世紀前半の「東三省」の語以外の他の地域呼称の用例・用法の紹介と検討、さらに、19 世紀を通じた「東三省」の語の用例・用法の時期的比較や、「東三省」の語とその他の語との用法の比較も、本来ならば併せて検討すべき事柄ではあるものの、それらについては別途検討することにしておきたい。

第 1 章 19 世紀前半における「東三省」の語の用例・用法とその特徴

(1) 嘉慶年間における「東三省」の語の用例・用法

(一) 嘉慶年間初から嘉慶 11 (1806) 年まで —— 「東三省」の語と反乱鎮王との関わり

嘉慶年間(1796-1820)の前半期において、『清実録』『仁宗実録』の中の「東三省」の語はほぼ、湖北・四川・陝西などで起こった白蓮教徒の反乱の鎮王のために派遣された「東三省官兵(兵丁)」あるいは「東三省人」を示す語句のかたちで現れている。以下、それら全ての記事を紹介していこう。なお、各記事の分析の際には、その各記事の内容・文脈に加え、「東三省」の語にみられる清朝の認識・評価のありようにも注目していきたい。

■1. 諭軍機大臣等、此次額勒登保等攻得石城口。乘勝進擊。分布官兵。堵截防守。兵分見單。何不併力一處。專擒首逆。若林之華。覃加羅。一經見獲。夥黨失所依恃。無難以次搜淨。昨已調撥吉林索倫兵三千。並將東三省豫備進哨兵丁百餘名。交惠倫、阿哈保、先行帶往。著額勒登保、及宜綿、酌量何路緊要。即告知帶兵迅速會剿。【『仁宗実録』卷 20 嘉慶 2 年 7 月丁丑(10 日)】

この白蓮教徒の反乱は嘉慶元(1796)年に起こったが、翌年の嘉慶 2 年以降、清朝もその鎮王を本格化させていく。この■1.の記事からは、嘉慶 2 年にすでに、白蓮教徒の反乱の鎮王に際して吉林の索倫兵と東三省の「豫備進哨兵丁」が援軍として派遣されていることが確認できる。

■2. 乙未。諭軍機大臣等、賊匪由南漳後界坪。西向房縣奔竄。其由興山衝過霧渡河賊匪。想必另係一股。明亮已統兵前赴宜昌。德楞泰帶兵已抵荊州。即日赴當陽截剿。有此兩路大兵。前後夾擊。當乘此機會。速剿完竣。荊州沙市地方。為商賈輻輳之地。本有荊州滿兵四百名在彼防堵。現在汪新又團集鄉勇。幫同堵禦。若德楞泰在當陽截往。自不致擾至沙市。至南漳一股賊匪。雖距襄陽漸遠。但亦不可不亟籌截剿。王文雄帶兵一千名。不敷剿捕。其帶領東三省官兵之惠倫、愛星阿、阿哈保等、以之領兵則有餘。以之調度則不足。現在賊蹤雖豫更遠。著景安即親赴襄樊一帶。往來稽查。所有續調官兵。止須酌留數百名。協同河北鎮兵、及河兵、在漢江北岸南陽一帶。擇要堵禦。其餘兵丁。景安俱帶赴襄陽、南漳、一路督剿。惠倫、愛星阿、

阿哈保等、俱聽景安調度。以期事權歸一。…（後略）【『仁宗実録』卷20 嘉慶2年7月乙未(28日)】

■3. 論軍機大臣等、賊匪在南漳保康房縣一帶滋擾。約萬餘人。王文雄帶兵一千餘名。不敷勦辦。現調山東兵一千五百名。及惠倫等所帶東三省官兵。景安當速帶赴保康南漳一帶。幫同王文雄勦捕。再賊匪中脅從附和者。自必不少。殲戮無遺。心實有所不忍。若降旨宥赦。恐愚頑無知。轉似因賊數衆多。難於勦淨。意在撫安。著傳諭領兵大臣、於臨陣時。作為己意。准其自行投生。如有拋去器械、投順官兵者、赦罪。有幫助官兵擒賊者、加獎。【『仁宗実録』卷21 嘉慶2年8月庚子(4日)】

続く■2.と■3.の2件の記事もその「東三省官兵」の援軍についての記事である。■2.の記事ではその兵数の多さやその援軍の管理と投入の難しさが記されているが、続く■3.の記事からは、実際にその援軍としての「東三省官兵」が山東兵とともに王文雄の援軍として進軍するよう命じられていることがわかる。

■4. 諭內閣、今派綸布春巴圖魯侍衛等十八人、前往川省軍營。解運餉銀。向來我朝滿洲世僕。遇有軍務。即籲求前往。其報効國家之心。皆出於至誠。初無為利之見也。乃近年來前赴軍營者。惟知按[接か?]站需索銀兩。及抵軍營後。又不能實力打仗。不過濫竽蔽事。而於歸途經過地方。索取銀兩。到家後坐擁厚資。故東三省人等凱旋後。輒指稱修墓告假。大率攜回索取資財。置買產業。此等陋習。朕所深知。事屬既往。姑不深究。綸布春等沿途惟當將解運之餉。留心照料。謹遵諭旨。約束隨帶人等。斷不可仍前騷擾勒索。儻不知悛改。一經察出。必當治以重罪。決不寬貸。再此次軍營。並未奏請添派人員。今遣巴圖魯侍衛等前往。原為照料解往軍餉。川省軍營之事。現已辦有頭緒。即日可期告竣。綸布春等到彼。如尚未蒞功。即留伊等在彼。將患病受傷者換回。亦無不可。但恐無知之徒。妄疑添兵。互相喧論。特一併降旨明白曉諭。【『仁宗実録』卷40 嘉慶4年3月己未(1日)】

しかし、他方で、■3.の記事からしばらく時間が経過した嘉慶4(1799)年3月の■4.の記事では、滿洲の世僕たる「東三省人」らに対して嘉慶帝が戒め、「東三省人」が四川からの凱旋を行う際には各人が私利を貪ることを厳に慎むことが命じられている。ここには、遠地への従軍時に利に趨くようになってしまいう陋習に染まりつつあった「東三省人」への嘉慶帝の負の評価もみて取ることができる。

■5. 壬申。論軍機大臣等、滿洲及東三省官兵。素性驍健。勇於赴敵。而統兵大臣調度不善。往往零用派撥。撥入綠營隊中。以致力分見單。轉有輕身陷陣之事。實為三年來軍營通病。著額勒登保、及各路帶兵大臣。嗣後派兵勦賊。總將滿洲東三省兵官。自為一隊。使我精兵蓄養銳氣。於應行奮擊時。令其併力直前。以勦烏合亂民。自必所向披靡。【『仁宗実録』卷55 嘉慶4年11月壬申(18日)】

そうした「東三省官兵」の陋習は■5.の記事にもみられているが、この記事は、強力な「東三省官兵」を分散して支援させるのではなく、そのまま一つの軍として機能させるべきと嘉慶帝が命じたものである。因みに、■4.の記事とこの記事を併せてみると、「東三省官兵」への嘉慶帝の戒めは必ずしも彼ら自身の能力低下という点に対して向けられているのではなく、それを統轄する将士の、官兵の管理の方法のほうに不備がある点に対してむしろ向けられているということが窺えよう。

■6. 乙未。論軍機大臣等、額勒登保奏、此次在毛耳亞青子亞地方打仗。傷損得力官兵。自揣無能。請另簡有福大臣以充經畧等語。額勒登保、數年來宣力戎行。助猷懋著。故特加恩授為經畧大臣。俾其盡心勦辦。克奏膚功。至疆場勝負。乃事之常。從前軍營遇有挫折。往往匿不以聞。今額勒登保據實入告。朕方軫念不暇。豈肯加以斥責。東三省之人。勇者固多。然忠勇端潔。實心體國。似額勒登保者頗少。額勒登保、即係朕之福將。其所請另派大臣。殊屬非是。前調黑龍江兵一千名。嗣因額勒登保等奏、賊勢窮蹙。始行停止。今賊衆仍復抵死抗拒。額勒登保可即熟籌現在情形。如需加添兵力。不妨即行調取。毋以糜費為慮。額勒登保、務須仰感皇考及朕簡畧之恩。整飭戎行。相機進剿。亦不可不顧國家大體。輕身涉險。將此密諭知之。【『仁宗実録』卷56 嘉慶4年12月乙未(12日)】

■6.の記事は、この反乱の鎮王において中核的な役割を担った額勒登保(エルデンボー, Eldemboo)³⁾に対

する嘉慶帝の評価を示したものである。吉林出身の額勒登保に対する勇猛さ・忠誠心に対してはもちろんのこと、彼を「東三省之人」の一人と位置づけていることからみて、嘉慶帝の認識の中には、「東三省人は勇猛である」との認識があったことを確認することができる。

■7. 諭軍機大臣等、勦辦教匪。已閱四年。尚未告竣。朕思此時若再欲添兵。其最得力者。自莫如黑龍江兵丁。但道路遙遠。調派需時。且沿途供頓浩繁。而到營後既不能服習水土。又不能曉悉地利。及凱旋時送回原處。尤多糜費。是各省防禦賊匪。與其遠為徵調。自不如就近招募鄉勇為便。在各該督撫之意。惟恐竣事後此項鄉勇。無所歸著。是以不敢多募。殊不知兵制雖有一定。而現在鄖陽、五郎、西鄉等處。業經定議添設營制。其餘要隘處所。將來尚須添兵駐守。以資控制。即可於鄉勇內分撥充補。特此再行通諭用兵省分各督撫。若尚須添兵。應於鄉勇內酌為招募。勤加訓練。俾成勁旅。再向來各軍營遇賊打仗。總以綠營居前。令其衝鋒接刃。而健銳火器二營。及東三省兵。俱在綠營之後。朕所素知。自添募鄉勇後。則又令鄉勇前敵。以禦賊鋒。設遇挫衄。則綠營及滿兵等相率先退。一得勝仗。則輿以為功。而首先陷陣之鄉勇。轉致不能邀賞。即如軍營中節次打仗得勝。所保俱係滿兵。綠營亦間有保列。至於鄉勇。則據實保奏者甚少。此實向來積弊。行軍之道。全在賞罰公平。方能鼓勵戎行。爭先効用。…（後略）【『仁宗実録』卷59 嘉慶5年2月壬辰(9日)】

■7.の記事は、「黒龍江兵丁」を代表とする勇猛な「東三省兵」を援軍として派遣しても、その派遣自体が遠路ゆえに難しく、また、派遣された「東三省兵」が実際の戦闘では健銳營・火器營とともに綠營兵や鄉勇の後方に位置するだけとなってしまうことを厳しく戒めているものである。こうした戒めは、上掲■5.の記事と同様、基本的には「東三省兵」自体は有力と認識されていたものの、その効率的な活用のほうは些か困難であった、ということを表現したものであろう。

■8. 又諭、東三省留京當差人員。定例、過二代以後。方准補用綠營。現在軍營正當勦賊之時。各省奏請分發。在在需人差委。每致乏人揀選。所有東三省人員。嗣後除本身留京之員、仍不准其補用營員外。至各該員子嗣。遇有各省奏請揀員。准其一體挑選。著為令。【『仁宗実録』卷66 嘉慶5年閏4月戊辰(16日)】

■8.の記事は、この反乱の鎮王のために各省が清朝に求めてきた人員派遣の要請に対し、「東三省人員」で京師に派遣されている者を綠營の人員として派遣するかどうかについて、嘉慶帝が指示を下したものである。ここでは、北京に派遣されている東三省人員の子息らの派遣が認められているが、この記事は、反乱の鎮王にあたっていた各省の認識の中にも、「東三省人員」の有能さが少なからず認識されていたことを物語るものといえよう。

■9. 庚寅。諭內閣、本年尚在皇考大事二十七月之內。筵宴典禮。概不舉行。本年年班應來之東三省將軍、副都統、盛京五部侍郎、各省將軍、副都統等、俱著停止。明年再行按班入覲。【『仁宗実録』卷67 嘉慶5年5月庚寅(9日)】

■9.の記事は、白蓮教徒の反乱に直接関わる記事ではなく、乾隆帝の死に伴う京師での典礼の取りやめによって「東三省將軍」らの上京を停止するという命令である。

■10. 癸巳。諭內閣、前因東三省官兵調赴軍營。日久不無疲乏。續行調派吉林黑龍江官兵一千五百名。前往更換。其需用馬匹。已飭令河南省上緊備辦乘騎。並於直隸營馬內。先後撥給八百匹解往應用。因思直省額設營馬。節經酌撥。一時不能足額。著加恩於官馬內挑出堪用者八百匹。撥還直隸省。補足所缺營馬之數。著兵部行文直隸總督胡季堂、派員來京接收。俾營馬足數應用。【『仁宗実録』卷71 嘉慶5年7月癸巳(13日)】

さて、「東三省」の語を含む『清実録』の記事は、再び白蓮教徒の反乱とその鎮王に関するものに戻っている。■10.の記事には、この反乱の鎮王のために派遣され、疲弊した「東三省官兵」の交替が命じられている。因みに、この記事の中では「東三省官兵」の交代要員として吉林と黒龍江の官兵が充てられ

ているが、ここからは、この反乱に対する鎮王のために派遣された「東三省官兵」の主力は吉林・黒龍江の官兵であったことがわかる。

■11. 又諭、據吉慶、瑚圖禮、謝啟昆奏、粵東省公捐銀三萬兩、粵西省公捐銀二萬兩、以備凱旋賞賚之用等語。所奏甚屬紕繆。教匪滋事以來、節次派調東三省各省官兵、分投勦辦。所以除莠安良、俾黎元均臻寧謐。年來籌備軍需、所發餉銀、已不下萬萬。動撥帑項、曾不少為靳惜。即由外省支撥者、亦均屬應行解京款項。初不因軍興需用浩繁、稍有累及民間。各省地方大吏、自所深悉。此時大功將次告竣。其凱旋賞犒、需費幾何。何待外省捐資備用。況朕屢經降旨。嚴諭內外臣工。不得稍涉言利。蓋深有鑒於利國之事。多係病民。即目前暫開捐例。亦係不得已之舉。現在工賑已畢。軍務指日完竣。即當飭諭停止。朕躬行節儉。為天下先。惟有休養生息。以期百姓康阜。元氣日復。漸臻上理。焉有因年來度支繁費、設法科斂、以裨國用之理。損下益上之舉。朕斷不為。百姓猶朕之子。焉忍剝削。乃朕諄諄誥誡。至再至三。…（後略）【『仁宗實錄』卷 88 嘉慶 6 年 10 月丙午(3 日)】

■12. 諭軍機大臣等、熊戴崔胡股匪。經孫清元等追勦。均有斬獲。賊勢日蹙。額勒登保現又到楚。與德楞泰會合。分路搜擒。如熊翠、熊方青、戴四、崔宗和、胡明遠、五逆。概行殲戮。其零匪不過百人。即可馳奏大喜黃摺。儘統計盈千。斷不可稍存迎合。務須上緊督勦。剋日奏功。至額勒登保途次白土關。聞賊匪竄近。即留穆克登布暫駐督率。所見正與昨旨相合。穆克登布、於平利一帶路徑情形。素為熟悉。該處防堵事宜。竟責成專心辦理。遇有楚匪。毋使一名闖入為要。又據奏通行各路。將東三省及廣東、廣西、兵丁先徹。所辦甚是。現在大功將次告竣。遠省調派兵丁。從征日久。竟無庸逐一查驗。著額勒登保等即行派員。帶回歸伍。即諭令知之。【『仁宗實錄』卷 103 嘉慶 7 年 9 月己丑(21 日)】

続く■11.と■12.の2件の記事も、白蓮教徒の反乱の鎮王のために派遣された「東三省官兵」あるいは「東三省兵丁」の動静についてのものである。清軍の反攻により、嘉慶6(1801)年頃からこの反乱は下火になりつつあったが、この反乱の鎮王のために用いられた「東三省官兵」「東三省兵丁」の凱旋の具体的な方法とその凱旋に関わる問題点を指摘しているのがこの2件の記事である。

以上のように、この時期の「東三省」の語はほぼ全て、白蓮教徒の反乱の鎮王に関する文脈の中で用いられていることがまず確認できる。また、その「東三省」の語の用例は、乾隆帝の所謂「十全武功」の際の各記事を中心とする18世紀の「東三省」の語の用例とほぼ同様であり、地域呼称としての用法ではなく、人的集団を指す用法が主となっているものといえよう。

さて、そうした性格の記事は、以下のように、この反乱の鎮王の長期化に伴ってこの後も多く現れてくるのであるが、その前に、嘉慶7(1802)年から8(1803)年の時期には、「東三省」の語を地域呼称として用いていると認め得る記事が散見されている。以下の■13.から■15.までの3件の記事がそれにあたる。

■13. 諭內閣、巡視東三省事務。前經議定裁汰御史。五年一次、於盛京五部侍郎內奏請簡派。今據晉昌奏、巡視盛京。業已屆期。將五部侍郎銜名、開單請旨。但思吉林、黒龍江、兩處、非盛京所屬。尚可令該侍郎等前往巡視。至盛京係本管地方。亦派令一體查察。究於政體未協。所有此次巡視盛京事務。著派大理寺卿窩星額去。嗣後除吉林、黒龍江、屆五年期滿、仍將該侍郎等奏派外。其盛京一省。屆期著該將軍奏請。候朕於在京之滿漢三四品京堂內簡派。【『仁宗實錄』卷 104 嘉慶 7 年 10 月乙卯(17 日)】

■13.の記事は、「東三省」における行政の監視の方法についての改革に関するものであり、この用例は「東三省」の語を行政処理の対象となる地理的區域として用いているものであると考え得る。ただ、この記事においては、明確な地理的區域としてではなく、むしろ三將軍の管轄下にある官僚集團、あるいは彼らの諸業務自体を指す語としてこの「東三省」の語を理解すべきかもしれない。その意味で、この記事における「東三省」の語の用法は些か曖昧なのであるが、以下の■14.と■15.の2件の記事の中の「東

三省」の語は明らかに、マンチュリアを表現する語として用いられていると考えてよからう。

■14. 乙未。禁貧民攜眷出口。論內閣、兵部議奏、稽查關口出入民人、分別酌定章程一摺。山海關外。係東三省地方。為滿洲根本重地。原不准流寓民人雜處其間、私墾地畝。致礙旗人生計。例禁有年。自乾隆五十七年京南偶被偏災。仰蒙皇考高宗純皇帝格外施恩。准令無業貧民出口覓食。係屬一時權宜撫綏之計。事後即應停止。乃近年以來。民人多有攜眷出關。並不分別查驗。概准放行。即因嘉慶六年秋間、畿南州縣被水成災。間有窮黎攜眷出口之事。迨至上年。直隸收成豐稔。民氣已復。何以直至今春、尚有攜眷出關者數百餘戶。彼時韋陀保正任該處副都統。稽查是其專責。見有出口民戶如許之多。自應奏明請旨。即放行以後。亦當奏請飭禁。乃漫不經心。前後總未陳奏。任意辦理。殊屬非是。韋陀保著交部議處。嗣後民人出入。除隻身前往之貿易傭工、就食貧民、仍令呈明地方官給票、到關查驗放行、造冊報部外。其攜眷出口之戶。概行禁止。即遇關內地方、偶值荒歉之年。貧民亟思移家謀食、情願出口營生者。亦應由地方官察看災分輕重。人數多寡。報明督撫據實陳奏。候旨允行後。始准出關。仍當明定期限。飭令遵限停止。毋得日久因循。致滋弊端。此次定立章程以後。並著直隸山東各督撫、接到部咨、徧行出示曉諭。以現在欽奉諭旨、飭禁民人攜眷出口。該民人等當各在本籍安業謀生。不得輕去其鄉。希圖出口謀食。相率赴關。以致半途而返。庶民人知干例禁。不致徒勞跋涉也。【『仁宗實錄』卷 113 嘉慶 8 年 5 月乙未(2 日)】

■15. 又論、昨兵部將軍營撤回寧古塔防禦色克金保帶領引見。色克金保所奏履歷。竟非清語。因交軍機大臣詢問。據稱伊平日屯居。該處漢人居多。故未諳清語。色克金保以東三省人。不能清語。本應治罪。姑念伊在軍營甚屬奮勉。著加恩寬免。即令回任。色克金保身為防禦。有管教兵丁之責。且年歲尚輕。著交秀林善為教導。務令熟習清語。至東三省係我朝根本之地。清語即如鄉談。原應不學而能。乃竟有不曉清語之人。想東三省似此者尚復不少。相沿成習。不惟不曉清語。必致技藝廢弛。所關甚重。不可不加整飭。著盛京吉林黑龍江將軍等、各將所管官弁、嚴行教訓。務令馬步射精銳。清語嫻熟。毋忘本業。【『仁宗實錄』卷 113 嘉慶 8 年 5 月壬寅(9 日)】

■14.と■15.の2件の記事はいずれも、地域呼称としての「東三省」の語の用法とみなし得る記事といえよう。■14.の記事は、漢人移民の移住対象地域となってしまうマンチュリアを「東三省」の語で表現したものであり、■15.の記事は、記事後半の下線部に表現されているように、「東三省人」が居住し、彼らの文化を維持すべき特殊地域としてのマンチュリアを表現したものである。これらの記事のいずれにも、地域を示す「根本重地」や「根本之地」の語が付されていることに鑑みれば、その理解でほぼ間違いはなかろう。因みに、この2件の記事のような、地域呼称としての「東三省」の語が用いられている記事は、前稿で確認したような18世紀後半の時期以降に新たに現れてきたような地域呼称としての用法と軌を一にするものであったと言ってよい。

さて、一旦下火になったこの反乱は、嘉慶8(1803)年頃からその残党が郷勇らと結んで一時活発になった。これに対応するかのように、嘉慶8年から9年初頭にかけての、以下の■16.から■19.までの各記事は再び、その反乱の鎮王のための「東三省官兵」の派遣と撤収について記すものとなっている。

■16. 辛巳。論軍機大臣等、隨征鄉勇一項。本非各寨堡團勇可比。前曾節次降旨、諭令額勒登保等於大兵未徹之前。陸續裁撤。誠以該勇等半係無業游民。從征日久。多有桀驁難馴之氣。不可不豫為安置。乃此次摺內。何以僅稱凱撤東三省官兵、及外來客兵。而於鄉勇轉未提及。設蔽功以後。將官兵全數撤回。該鄉勇等聞有滋事。又何以彈壓。額勒登保等寧不籌慮及此乎。將此傳諭知之。(額勒登保奏報、官兵搜山。殲擒餘匪。並生擒狀害穆克登布之首逆熊老八。得旨嘉獎。賞出力鄉勇羅得興、胡貴、軍功盧仕俸、頂帶藍翎。)【『仁宗實錄』卷 115 嘉慶 8 年 6 月辛巳(18 日)】

■16.の記事は、この反乱の鎮王のために駆り出された郷勇の凱旋・撤収についてのものであるが、ここには併せて「東三省官兵」の撤収に関する言及がある。この記事では、兵士として維持するのに不安

がある郷勇からまず撤収させ、そのあとに「東三省官兵」らを撤収させることが命じられている。

■17. 論軍機大臣等、額勒登保等督率將領、分路搜剿。多有斬獲。共計殲擒賊匪百十人。並將偽元帥趙金友拏獲。額勒登保、勒保、於拜摺後。即分東西兩路進發。分投督辦。俟川匪排搜淨盡。額勒登保親至湖北周歷巡查。所見亦是。本日吳熊光奏留東三省馬隊官兵。額勒登保俟回京時。即可帶領由襄陽至河南一路凱旋。俾所過地方。知經路親帶大兵回京。聲勢更壯。其川省應徵弁兵、應行進京者。亦可一併順帶前來。至另摺奏、籌商裁撤客兵、及酌擬留防搜捕章程。所議悉合機宜。鄉勇一項、隨征日久。半係無業可歸之人。朕節次降旨總以安頓鄉勇為亟。額勒登保現咨商德楞泰、請將現無家業、情願歸營之人。准照川省所設新兵之例。各給守糧一分。俟有制兵缺出。隨時撥補。所見甚是。入營充伍。既有錢糧可資養贍。該營員等更可隨時鈴束。如有桀驁滋事者。即可懲之以法。額勒登保等籌議及此。既稱萬全無弊。此即伊等專責。設安置稍有不妥。惟伊等是問。此外如先徵外省及東三省馬隊之兵。請留本省官兵分路防剿。每月所費餉銀、不過十四五萬。並於川陝楚三省分駐大員。以資統率各款。均照所議。再據稱拜發六百里喜摺之後、擬將經略印信、先行申繳一節。此可不必。現在三省邪匪、雖已蕩平。尚有一切應辦善後事宜。即日德楞泰進京後。額勒登保由川赴楚。順道排搜。一切文檄往來。均須鈐用印信。非如叅贊德楞泰現係成都將軍、尚有本任印信可用者比。額勒登保若將經略印信先行繳回。轉恐呼應不靈。且三省藏功完善。中外欣慶。額勒登保始終其事。其印信自應俟入都時親自齎回方符體制。將此諭令知之。【『仁宗實錄』卷115 嘉慶8年6月戊子(25日)】

■18. 論軍機大臣等、楚境餘匪。統計不過八十餘人。吳熊光當上緊搜盡。剷絕根株。著責成慶成、慶溥、吉林泰、李天林等、奮力追捕。剋期完竣。其另片所奏挑留黑龍江奮勇官兵一百十三員名。楚省平地居多。東三省馬兵馳驟。較為得力。而黑龍江官兵弓箭。賊匪更形畏懼。應即將此項官兵、交與慶溥等帶領排搜。自屬有益。即撤回稍遲。亦無不可。至另摺奏稱、將本省官兵、密為分派、陸續抽調、先將兩廣湖南官兵照數撤回等語。所辦非是。外省官兵。自調赴從征以來。已閱數年。今搜捕垂竣。奏報肅清。若復於各營汛續調官兵。未免民情疑駭。且新調兵丁。於各處山林徑路向未熟悉。難期得力。況一撤一調。沿途應付供支、及借給行裝安家等項。亦屬虛糜。莫若將兩廣湖南官兵先行撤遣回營。至湖南官兵。係該督所轄。即餘氛淨掃以後。或有需資彈壓之處。亦不妨再行酌留。陸續撤回。儘可毋庸亟亟也。將此傳諭知之。【『仁宗實錄』卷117 嘉慶8年7月庚戌(18日)】

さて、この鎮王はなかなか完了できなかったようで、兵士の撤収が計画されていたものの、■17.と■18.の2件の記事からは、この殘党の鎮王に携わる各省から「東三省馬隊之兵」を撤退させずにそのままその鎮王に用いたいとする要望が多かったことが窺える。それらの要望に対し、嘉慶帝は「東三省馬兵」をそのまま鎮王に用いることを許可するのであるが、ここからみて、鎮王に携わる官僚も、また嘉慶帝自身も、この「東三省馬兵」の有能さを少なからず認識していたことが推測できよう。

■19. 飭將軍都統督撫提鎮整飭營伍。論內閣、本日軍機大臣同戶兵工三部議駁、御史體德奏請增改軍需則例一摺。已依議行矣。閱摺內有鄉勇一項、不應復有募用之語。所奏甚是。國家設兵所以衛民。內而八旗勁旅。外而駐防綠營。原以備一時徵調之用。我朝軍政修明。從前用兵外域。平定準噶爾回部大小金川、以及剿捕內地亂民。如王倫、蘇四十三、田五之類。均係調用額兵、隨征奏凱。從未有雇募鄉勇之事。自臺灣匪徒林爽文滋事時。該處地隔海洋。本有義民等急公募義。請効馳驅。因而隨宜量用。協同官兵分司搜剿。迨至勦辦邪匪。帶兵大員、及地方官等、召募鄉勇多名。輾轉隨征。以致愈集愈多。數盈累萬。在鄉里小民等、各衛身家。遇地方偶有不靖。自行團集什伍。保護田廬。原屬通曉大義。分所當然。若竟官為雇募。隨營接仗。甚或調往隔省從征。經年累月。成何體制。試思八旗兵丁。如簡發東三省官兵。不開有召募奉天等處民人從軍者。即簡發京營勁旅。亦從未有令宛兩縣民人幫同出兵者。況國家兵制之設。有將軍都統督撫提鎮以資統轄。設立營伍。蒐簡軍實。豈尚不能為國宣力。乃必藉閭閻未經練習之人。供疆場折衝之用。則又安用官兵為耶。揆厥所由。皆因武職大員。不能實心辦公。…(後略) 【『仁宗實錄』卷125 嘉慶9年正月甲寅

(24日)】

最後に、■19.の記事では、この反乱の鎮王に際して民人を募兵し、郷勇を鎮王の主力としたことに関する評価がなされているが、嘉慶帝は郷勇によるこうした反乱鎮王のかたちはあるべき姿ではなく、本来ならば「東三省官兵」を含めた旗人集団によってその鎮王を行うべきであった、という点を強調している。

以上、上掲■16.から■19.までの4件の記事はいずれも、白蓮教徒の反乱の残党の鎮王のために派遣された「東三省官兵」の凱旋・撤収に関するものである。反乱は嘉慶9(1804)年初頭の時点でようやく鎮王されつつあったのだが、この4件の記事も含め、上掲の各記事からは、この時点までの「東三省」の語が概ね、この反乱の鎮王のために派遣された兵士集団を表す語として用いられていたことをあらためて確認することができよう。

では、その反乱鎮王以降の記事における「東三省」の語はいかなる文脈の中で用いられるようになるのだろうか。以下の■20.の記事には、漢人移民の移住対象地域となってしまうものの、「東三省人」が居住し、彼らの文化を維持すべき特殊地域としての「東三省」という認識が表現されている。

■20. 諭軍機大臣等、那彥成奏、籌辦齊齊哈爾事宜一摺。並條列六款進呈。朕詳加披閱。如所請嗣後內地民人、有來黑龍江貿易者、准其攜眷居住、種地謀生、屯丁之放出為民者、亦准其安居樂業、不必逐出境外一款。事不可行。東三省為根本重地。原不准民人雜處。致礙旗人生計。是以內地貿易之人。不許在彼居住謀生。如有私自逗遛。尚當驅逐出境。昨因山海關等處出口人多。曾降旨定立章程。嚴行稽察。豈可執通商致富之說。轉令內地民人。前赴黑龍江居住謀生。聽其自便乎。若云准令漢人居住。則地方富庶。兵力可以勇健。亦無此理。東三省旗人以弓馬為本務。每日勤加演習。及捕打牲畜。兵力自臻驍健。設與漢人相處。必致沾染氣習。漸流懦弱。今黑龍江之兵。勝於吉林。而吉林又較勝於奉天。可見強兵之法。不在通商。此其明驗也。又據稱、嗣後黑龍江等處、自副都統至協領佐領等官、本處旗人、祇用一二人、其餘皆以京員及盛京吉林旗員升調一節。將軍、副都統、有統轄圍營之責。自當簡用京員。前因副都統額勒琿、達斯呼勒岱、均係該處旗人。辦理諸務恐有瞻顧。是以降旨將斌靜調為齊齊哈爾副都統。伊鏗額調為墨爾根副都統。至協領佐領等官。即為各該營官等升轉之階。外省駐防。皆係以本處旗人升調。營制有常。若黑龍江一處。改用他處之人。勢必將各省駐防一律照辦。亦未免事涉更張。斷不可行。至於把持勾結之弊。惟在該將軍副都統等、潔已奉公。留心管束。自可潛消積習。豈屬員盡用他處旗人。遂能經久無弊乎。以上二款。應無庸置議。惟據稱該處田土多曠。屯丁日貧。自當妥為調劑。或於該處屯丁子弟內。或於發往罪人內。酌給籽種牛具等項。責令開墾。以期土無遺利。人有恒業。方為盡善。至所稱每丁領牛一隻。須交糧二十五倉石。而官員子弟、及兵丁之不領牛隻者。一任種地之多寡。並無升斗之糧。以致富者日富。貧者愈增積欠。此則太覺偏枯。亦應將官員及豐厚之戶。承種地畝。立定限制。不准私行開墾。著觀明、會同宜興、體察情形。酌立章程。總當使旗人等均沾樂利。期於行之可久。並將那彥成所奏請添給新官莊牛隻倒斃銀兩、及請減額糧等款。一併詳悉妥議。用漢字摺具奏。候旨遵行。再據那彥成面奏、黑龍江兵丁有不能騎射者。該處兵丁素稱勁旅。豈可廢弛騎射至此。並著觀明隨時查察。務令嫻習為要。將此諭令知之。【『仁宗實錄』卷126 嘉慶9年2月癸酉(13日)】

上掲■14.や■15.の記事と同様、この■20.の記事においても、現実にはマンチュリアを漢人移民の移住対象地域として理解せざるを得ないものの、本来は「東三省旗人」が居住し、彼らの文化を維持すべき特殊地域として位置づけるべきであるとする清朝の理念を表現する語として「東三省」の語が用いられているようである。すなわち、こうした記事の中の「東三省」の語には、中国内地の他省・他地域とは異なる特殊地域としてのマンチュリアに対する清朝の理想と願望が少なからず込められていたと言えるの

ではなかろうか。

さて、以下の■21.と■22.の記事には、白蓮教徒の反乱に対する鎮王の際のその鎮王軍の主力となった中国各省の緑営・郷勇の技量についての言及があるが、これらの記事では、そうした緑営や郷勇を主力とした鎮王軍の技量の比較対象として、「東三省」の兵が議論の俎上に挙げられている。

■21. 論軍機大臣等、惠齡奏、查明陝省各營軍裝馬匹等項、請俟征兵全行凱撤後、再行估造等語。著照所請、准其展限暫緩查閱。並降旨諭知額勒登保奏。至摺內所稱、官兵隨征日久、奔走山徑、於排隊走陣亦多生疎之語。實屬自相矛盾。隨征官兵而不知排隊。伎倆可知。但外省營伍操練、所演技藝、多係虛應故事。至臨陣對敵、全不賴此。即如東三省勁旅。所向克捷。何嘗講習排隊走陣等項虛文耶。該督惟當督飭鎮將各員、平日認真訓練。俾成節制之師。原不待查閱營伍之際。始求嫻習技藝也。將此諭令知之。【『仁宗實錄』卷 129 嘉慶 9 年 5 月辛亥(23 日)】

■22. 諭內閣、永保奏查閱營伍情形各摺。據稱、將閱過各營官兵技藝優劣、分別等第、並將庸劣官弁等酌量降革、及將古州八寨屯軍訓練事宜、交總兵武隆阿會同該管道員就近校閱等語。自應如此辦理。其所奏貴州苗疆地方、現有修辦礮堡事宜。提督富志那、熟悉該處情形。請勅令常赴松桃一帶督同文員指示辦理之處。亦著照所請行。…(中略)…又據另摺奏、分別營伍兵丁技藝緩急、覈別積習、請旨勅交覈議一摺。所奏本屬可行。有何覈議。國家設立武備。所以訓練營伍者。惟鎗箭最為利器。不獨衝鋒陷陣。藉資敵愾。即行圍剿武。所貴獲禽。均當以弓力勁而有準、放鎗捷而多中者為上。其馬射、亦須挽強命中。馬上穩實。始堪制勝。原不在進退步伐間、講習虛文。我朝東三省之兵。所以素稱勁旅、戰則必克者。職是之故。今綠營積習。於一切技藝。率以身架架式為先。弓力軟弱。取其拽滿適觀。而放鎗時、裝藥下子。任意遲緩。中者十無一二。即陣式雜技。亦不過炫耀觀瞻。於講武毫無實效。永保此次校閱。以實甄別。所辦甚是。督撫提鎮、均有統轄營伍之責。嗣後務當飭知將弁等、平時訓練官兵。弓以六力為度。箭靶不得違式暗加寬大。放鎗者、裝藥下子勾火均須迅速。而總以準頭為要。申明教誡。該督撫提鎮等、尤不得養尊處優。自耽安逸。惟應不時親加校看。以期卒伍皆成勁旅。力挽綠營虛浮結習。方為不負委任。將此通諭知之。【『仁宗實錄』卷 131 嘉慶 9 年 7 月丁亥(1 日)】

この反乱でその鎮王軍の主力となったその緑営・郷勇との比較としてではあるものの、この 2 件の記事に共通する「東三省」の軍隊・兵士に対する評価はいずれも、その強靱さと有能さに求められているようである。とすれば、この白蓮教徒の反乱の鎮王に際して「東三省之兵」の派遣が求められ、清朝もその派遣を命じたのは、緑営や各省の客兵、さらには郷勇にも求めることができないその強靱さと有能さへの評価があったからであろうし、仮に、その強靱さと有能さへの評価が各省の客兵や郷勇と比較した上での相対的な評価に過ぎなかったとしても、そうした「東三省之兵」への評価は嘉慶帝や清朝政府、あるいは各省官僚に共通して意識されていたものであったのではなかろうか。

さて、続く 2 件の記事は省略するが⁴、清朝の、「東三省」の兵に対するそのような評価・認識は、以下の■25.から■29.までの記事の中にも散見される。それらの記事はほぼ、海賊の首領蔡牽による台湾占拠と、嘉慶 11(1806)年 7 月に起こった「寧陝鎮新兵」の反乱に対する鎮王に関するものである。

■25. 又諭、德楞泰出京以來、節據李長庚、愛新泰等、奏到蔡逆窮蹙各情形。看來南北陸路匪徒。疊經官兵勦殺。紛紛潰散。可毋庸另行厚集兵力。前所派京中後起之巴圖魯侍衛章京等、及東三省勁旅、四川屯練兵、停止調派。惟四川綠營兵。令勒保豫挑一千名。候旨調派。如尚需用。德楞泰即可向彼咨調。至德楞泰身為大臣。受恩深重。如果行抵廈門。臺灣匪徒業已勦盡。彼時賽沖阿自必知會德楞泰、無須渡臺。即在彼署駐數日。閱視海疆情形。俾地方兵民。見有重臣到彼經畫。共知儆畏。亦不為無益。或德楞泰行抵浙江。已得有臺灣蕞事之信。或蔡逆向北逃竄。又思至溫台一帶滋擾。德楞泰即赴該處海口一帶。會同清安泰督率勦辦。將此諭令知之。【『仁宗實錄』卷 158 嘉慶 11 年 3 月辛酉(13 日)】

■26. 論內閣、昨因文寧奏、先後拏獲私買紅單領馬匹各犯、已諭交托津、德文、提集案犯、嚴審定擬具奏矣。私買紅單一事。由來已久。蓋因買者賣者、及察哈爾交收馬匹之人、均有便利可圖。彼此出於情願。雖明知犯法而不顧。然其弊不可勝言。隨扈官兵、給予紅單領馬乘騎。原以其差使繁重。俾資馳驅之用。係屬我朝舊制。…（中略）…尋議、隨圍捷報放馬司員、及東三省學獵官兵、杭愛墨爾根養鷹額魯特官兵、應領馬匹。業於嘉慶九年議減。其兵部筆帖式、向係給馬四匹。應各減一匹。領催馬甲、及圍場兵役、僅敷乘騎。應毋庸議。此次議減之後。如仍有私賣紅單、及折交銀兩者。刑部辦有成案。應照案治罪。察哈爾官兵折收銀兩者、一體科罪。馬販等從嚴問擬。其散給紅單之該管官、並派出驗收驗放之王大臣等、一併議處。再查每年熱河進哨、各處派出隨從官兵、除在京領用馬匹外。其有應行補給及放給後起官兵馬匹。向在石片子地方放給。該處距熱河二百餘里。官兵恐未能親往領騎。易滋弊端。嗣後請將石片子應放馬匹、均於進哨前、在二道河全行放給。從之。【『仁宗實錄』卷 165 嘉慶 11 年 8 月癸巳(19 日)】

■27. 論軍機大臣等、本日德楞泰奏到、朕以為必係勦賊勝仗情形。及加披閱尚係未經擊勦。太覺遲緩。寧不念及朕宵旰憂念。無時或釋。雖在木蘭行圍遣將籌兵。未出崖口。先令星夜馳往。特為早一日成功、百姓早一日安枕。若如此耽延。大失朕望矣。前據奏稱、賊匪攻撲堡寨。經寨民等勦禦。賊即敗退。可見賊勢不為猖獗。若以此遲滯日久、動輒以待兵為詞。是真養癰貽患。豈德楞泰竟欲俟溫春等所帶東三省兵、並富翰等續帶之兵、一齊到彼後。始行勦辦。有是理乎。看來德楞泰竟不免先形氣餒。屢次遷延。此旨到日。若再不即時督兵勦擊。或致任賊遠竄他處。則惟德楞泰是問。慎之勉之。…（後略）【『仁宗實錄』卷 166 嘉慶 11 年 9 月壬子(8 日)】

■28. 論軍機大臣等、德楞泰奏、新兵擊勦叛賊、並解朔縣城圍一摺。德楞泰軍營。現在豐紳所帶松潘鎮及建昌新驛等處官兵、先後趕到。統計已有兵四千數百名。扎克塔爾、楊遇春等、亦帶兵五千餘名。合計已有萬餘。兵力不為不厚。賊匪祇有一股。不過二千餘人。脅從者居十分之六七。兇悍者僅六七百人。以如許兵力。加以東三省勁旅。有何難辦。務即乘此兵威。勉力辦理。一鼓殲除。均聽奏捷佳音。切勿稍有延緩。至此次楊芳督率新兵。奮力擊勦。斃賊數十人。德楞泰應將新兵加倍獎勵。明白曉諭。不但潛消其反側。更可令其鼓舞効命。於勦捕更易蔽事。楊芳前因該管營兵滋生事端。繼而又不趕緊追賊。經德楞泰奏參。業經降旨革去翎頂。此次督兵攻賊。受有矛傷。尚屬奮勉出力。楊芳、著加恩先賞還頂帶。令其勉力勦賊。以觀後效。所有此次起事各首逆、及有名賊目。務須一律擒獲。按律嚴辦。毋任一名漏網。此為最要。將此諭令知之。【『仁宗實錄』卷 167 嘉慶 11 年 9 月壬戌(18 日)】

■29. 又論、兵部會同吏部奏、議處德楞泰、倭什布、均照溺職例革職請旨一摺。所議甚是。德楞泰經朕特命為欽差大臣。前赴陝省勦辦寧陝叛賊一經到陝。自當迅速進兵。專意勦辦。乃遷延多日。總以調兵未齊藉辭等候。已屬遲緩。迨朕節次嚴催。始據奏報楊芳、及扎克塔爾、楊遇春、接仗兩次後。旋即奏報納降。朕因賊犯人數既多。斷無駢誅之理。因降旨令將各犯詳悉查明。仍行按例定擬。分別監禁。候旨覈辦。而德楞泰又不候諭旨到彼、遵奉施行。即擅將賊中投出之民人匪犯三千八百餘名。悉予資遣回籍。此內並有各處軍流人犯、曾經助賊抗拒官兵者。悉置不問。甚至將曾充兵丁叛逆滋事之二百二十四名。竟交與將弁管帶。各回原營約束操防。其糊塗錯謬。壞法養奸。至於如此。實出情理之外。大負朕恩。殊不可解。此事辦理之初。過於張皇。繼又失之草率。不顧後患。將就完事。八月間、德楞泰曾以賊匪裹脅漸多。必須厚集兵力。懇請簡派巴圖魯侍衛、及東三省墨爾根學圍官兵、前往協勦。朕以其所見適與數日前所降諭旨相符。方加優獎。是以即於木蘭行圍之際。先後簡派溫春、富翰等、率同巴圖魯侍衛章京、及東三省勁旅。分起進行。星馳協勦。乃德楞泰於伊等到陝之後。並不令其乘銳圍攻。滅此朝食。惟以納降為事。任意辦理。現已飭該將士等分起回京。此無論沿途備辦軍需。虛糜餉項。其所費者不貲。而如此簡練勁卒。遠道馳赴。竟不令其痛接一仗。往返徒勞。成何事體。…（後略）【『仁宗實錄』卷 169 嘉慶 11 年 10 月己丑(16 日)】

■25. の記事は、蔡牽による台湾占拠に対して清軍が優勢となったために「東三省勁旅」の投入が見送

られたことを記したものであるが、それ以降の■26.の記事を除く3件の記事の内容からは、德楞泰(デレンタイ, Delantai)の怠慢ゆえの「寧陝鎮新兵」の反乱の鎮王の遅れを懸念した嘉慶帝自身の意志によって、強力な援軍として「東三省(官)兵」が追加投入されたことを確認することができる。この反乱は、その後は德楞泰の統率の下で速やかに鎮王されたが、強力な援軍としてこの「東三省(官)兵」を追加投入したこと自体に加え、これらの記事の多くで「東三省(官)兵」が「勁旅」(精鋭部隊)と形容されていることからみても、そこには「東三省(官)兵」の有能さ・強靱さに対する清朝・嘉慶帝の認識が確かに表現されていると言ってよい。そして、その「勁旅」が「東三省(官)兵」の語に限定して用いられている点に鑑みれば、当時の清朝は「東三省」を、他地域・他省とは異なる人材・人的集団の宝庫として、あるいはその人材を有する地域として確かに認識していたと言えよう。

さらに、以下の■30.から■32.までの記事にも、そのような清朝の「東三省」の兵に対する認識が窺える。

■30. 又諭、據觀明覆奏、黑龍江地方情形、兵丁不宜添演長槍請旨一摺。所奏甚是。東三省兵丁、專以打牲為業。騎射鳥鎗等技。本自精熟。虎槍素練習。若令與綠營兵丁一體兼學長槍。轉致誤其馬上技藝。所有盛京吉林黑龍江兵丁、均著毋庸兼習長槍。仍著照舊演習弓箭鳥鎗、及一切馬上技藝。務使益臻精銳。【『仁宗實錄』卷169 嘉慶11年10月壬寅(29日)】

■31. 又諭、兵部奏、遵旨議處扎克塔爾請照有意隱諱革職例革職一摺。扎克塔爾派往陝省軍營。隨同德楞泰勦辦寧陝叛賊。經德楞泰派在前敵。當賊匪由斜峪關南竄之時。扎克塔爾同楊遇春帶領河州固原等處官兵。前往追剿。趕上賊匪。當經痛加勦殺。殲獲多名。迨追至方柴關地方。遇見成隊賊匪。彼時天色已晚。官兵轉戰竟日。未免力疲。而賊匪恃險屯聚。人數眾多。官兵被賊衝壓數次。致有散失。扎克塔爾同楊遇春帶領親隨數十人。至該處把總營汛圍牆內駐守。賊匪正在四面圍繞之際。而溫春等帶領東三省馬隊適至。賊匪一見馬隊。南北兩山頭屯聚之賊。立時畏懼奔回。賊首蒲大芳、王文龍等、遂親率賊衆。趕至扎克塔爾、楊遇春馬前。棄械投誠。扎克塔爾等諭以如果實在投誠。可將首逆縛獻。徹退賊衆。再行定議。彼時蒲大芳等立將首逆陳達順、陳先倫、向貴、三人縛獻。扎克塔爾等一面令賊停紮。一面稟知德楞泰定奪。德楞泰接據稟報。率准受降。又不候諭旨。遽將叛逆二百二十四名。交與將士管帶各回原營。並將賊營內三千餘人。不問其是否係地方遊匪、及監犯軍流人等。竟與被裹之人一律遣散。種種紕繆。不可枚舉。全係德楞泰之罪。…・(後略) 【『仁宗實錄』卷170 嘉慶11年11月乙巳(2日)】

■32. 諭內閣、朕惟厚生之道。在乎節儉。國家重熙累洽。生齒日繁。日用所需。人人取給。而天之所生。地之所長。祇有此數。即使雨暘時若。歲獲屢豐。小民蓋藏。猶真不足。又況水旱不時。豈能盡獲豐稔。設遇歉歲。支絀倍形。若再性好奢華。不思撙節。勢必立見匱乏。何以保生聚而慶盈寧。即如本日戶部奏進嘉慶十年分民數穀數。朕詳加披覽。民數比上年多至二千七百七十二萬一百一十九名口。而各省存倉穀數。則比上年少二十九萬四千二百四十八石有零。自緣各該省間遇偏災。倉儲即有短絀。閭閻生計。安可不裕之於平日乎。近來八旗戶口。亦歲有增添。而所得錢糧。限於定數。伊等當差執業。亦須衣食稍充。方能安心習學。若平時不知節省。焉能自贍身家。乃邇年風氣。日就華靡。飲食衣服。無一不競美爭鮮。毫無節制。以致數日之用。罄於一日。數人之養。竭於一人。甚或飲酒看戲。遊蕩賭博。錢糧入手。任意花銷。不顧身家。罔慮後日。豈非自取困窮乎。朕崇儉黜奢。務敦淳樸。向來東三省隨圍官兵。於引見較射時。所服均係布素。深得持儉之道。甚為嘉悅。現在年終即須引見世職官員。及凡一切引見。伊等即服著布素。有何不可。又何須過飾衣帽。爭尚華綺耶。此後旗人等、尤當自知謹身節用。崇尚儉樸。以期仰事俯育。共慶生成。無負朕諄諄訓誨至意。將此通諭知之。【『仁宗實錄』卷172 嘉慶11年12月庚辰(7日)】

この3件の記事のうち、■31.と■32.の記事もこの反乱の鎮王に関する記事であるが、■31.の記事には「東三省馬隊」のその強靱ぶりが敵を震え上がらせる程であったことが記され、また、■30.と■32.の記事にお

いては、「東三省兵丁」の鍛錬すべき技芸の特徴と、団場に随行する「東三省官兵」の儉約ぶりがそれぞれ強調されている。こうした記事にも、清朝とその官僚が抱いていた「東三省」の、他地域・他省とは異なる独特のイメージが描かれている。

以上、ここまででか長くなったが、嘉慶年間初期から嘉慶 11(1806)年までの嘉慶年間前半期のほぼ 10 年間の『清実録』の各記事の中の「東三省」の語が含まれる合計 32 件の記事のうち、■14.や■15.の記事、並びに■20.の記事のような一部の記事——「東三省」の語をマンチュリアの地域呼称として用いている記事——を除けば、その「東三省」の語を含む記事はほぼ、反乱を鎮王するための「東三省官兵」の派遣・撤退に関する記事に限られているという点を確認することができよう。

(二) 嘉慶 12(1807)年から嘉慶年間末まで

——マンチュリアとその人々に関する理想像を表現する語としての「東三省」

それでは、嘉慶年間前半期に白蓮教徒やその他の反乱の鎮王を長期間かけてようやく完了させたあとの嘉慶年間後半期には、各記事の中の「東三省」の語は如何なる意味を含む語として用いられていたのであろうか。また、この時期以前の用法・用例と異なるような特徴・変化は現れてくるのであろうか。以下、嘉慶年間後半期における各記事を確認していこう。

■33. 諭内閣、觀明奏、審明遣犯關亞錦殺死四命、擬以凌遲梟示、請旨辦理等因一摺。閱案內情節。該犯於嘉慶十年間、因圖占房屋、砍死林受鳳、張公連二命。嗣因與崔寡婦之女長有兒通姦。於十一年十月內、將先與長有兒通姦之林棟砍死。又因長有兒嫁與八喜兒為妻。商量給錢買娶。復以措錢短少。起意謀殺八喜兒。情節固屬兇殘。該將軍因係在黑龍江地方犯案。比照殺死一家非死罪三人律、定擬凌遲請旨。所辦未為允協。定例凡殺死三命而非一家者、問擬斬決。今該犯雖兇殺四命。然究非一家。且殺非一時。若以犯案在東三省地方。輒即問擬寸磔。非准與定例不符。且遇有殺死實係一家四命之案。又將何以加焉。況此等獯悍匪徒。本係免死發遣之犯。到配後又復滋事。兇殺多命。該將軍審明後。或即照斬決本例、一面正法梟示。一面奏聞。自無不可。今擬以凌遲。而又俟奏明請旨定奪。奏函往返。有需時日。設該犯此數月內或有病斃等事。豈不倖逃顯戮。是名為從嚴。而兇犯轉或稽誅漏網。亦非詰奸勦暴之意。著刑部即將此案關亞錦一犯應如何定擬罪名之處、詳悉叅酌。妥速定擬具奏。尋奏、關亞錦應按律斬決梟示。從之。【『仁宗實錄』卷 176 嘉慶 12 年 3 月戊午(16 日)】

■33.の記事は、流刑となった罪人が黒龍江で起こした殺人事件の量刑についてのものである。「東三省地方」では特に犯罪に対する処置が厳しく、この殺人事件の被疑者は「斬決」に処せられた上で「梟示」するよう命令が下っている。このように、黒龍江の他、盛京・吉林の各地方が、刑罰・法制や治安維持の観点からみても特殊なものとして認識されており、この記事では、そうした認識が「東三省」の語で纏められて表現されているものといえよう。

■34. 又諭、本日刑部議覆、汪志伊奏拏獲謀叛之湖北提標左營馬兵徐榮等分別治罪一摺。已另降旨飭遵。至摺內稱該管遊擊雅金泰、未便以其不識漢字稍為姑容、請旨革職一節。外省綠營辦理事務。文移往來。俱用漢字。該管營員即僅識漢字。尚恐於一切營務。不能妥協辦理。若併漢字不識。勢必至稿案茫然。動形竭蹶。即如已革遊擊雅金泰、於部文內、令俟有應減馬兵缺出陸續改挑步兵之處。因不識漢字。未能理會部文。先後將馬兵王連等二十一名、即行降補步兵。辦理錯謬。以致兵丁不服。釀成事端。是其明驗。嗣後旗員、及東三省人員。有揀補各省綠營武職者。各該管上司保送時、不得以不識漢字之人濫行充數。及揀選時、仍著欽派大臣等臨期詢其是否能識漢字。並面加試驗。其不識漢字者不准揀選。方免臨事舛誤。於營務庶有神益。

【『仁宗實錄』卷 179 嘉慶 12 年 5 月戊申(7 日)】

続く■34.の記事では、「東三省人員」の語が「旗員」の語と並記されているが、その両者が緑營の武職

に就く場合には漢字の素養を必須とすることが命じられている。すなわち、この記事からは、清朝が「東三省人員」の中には漢字を理解できない者も多いという認識を持っていたことが示唆されるが、このように、人的集団の枠組みの一つである「東三省」は、この時点でも、中国内地の武官とは異なる特殊な人的集団の枠組みの一つとして清朝には認識されていたとみることができよう。

■35. 論内閣、本日勾到奉天省情實人犯。內狡犯多爾吉怕郎窪、宋存信、陸保三名、俱習學邪術治病。或用鳥鎗。或用鋼刀。致將病人傷斃。經刑部依異端法術醫人致死例、擬絞情實。覈其情節。均係病者情願邀請該犯洩其醫治。失手誤傷。致斃人命。俱加恩免予勾決。但東三省地方有此邪術治病風氣。不可不嚴行禁革。著該將軍府尹等、轉飭所屬、隨時出示曉諭、以醫師劑藥。古有明文。豈有火器金刀能療治疾病之理。如再有傳習此種異端法術者。即先行查拏禁絕。照例治以應得之罪。免致鄉愚被其誘惑。屢有失手狀生之事。亦保全民命之一道也。【『仁宗實錄』卷201 嘉慶13年9月辛巳(18日)】

■35.の記事にも■33.の記事と同様、「東三省地方」という語句がみえており、この記事からも「東三省地方」が刑罰・法制・治安維持の観点からみた特殊な地理的領域として認識されていることがわかる。この記事では、異端の医術により殺人を犯した者に対する処置について検討されているが、ここで特に注目すべきなのは、「東三省地方」では異端の医術の風潮が蔓延することそれ自体に強く警戒すべきことが表現されている点である。この記事は、殺人事件自体よりもむしろ、「東三省地方」の風紀を乱しかねないこうした異端の医術を禁絶すべきことのほうを強調するものであったと言えるのではなかろうか。

刑罰・法制・治安維持の文脈からみた特殊な地理的領域として「東三省」の語を用いている上掲■33.や■35.の記事と同様、以下の■36.と■37.の2件の記事も、「東三省」の語を地理的・空間的枠組みとして用いているものと考えられる。

■36. 嘉慶十五年。庚午。六月。甲申朔。論内閣、祥保奏、失察偷挖金塊之額魯特總管車伯克等、請交部分別議處、並自請察議等語。前屢降旨嚴拏達爾達木圖山內偷挖金塊人犯。今附近達爾達木圖以外布呼圖山內。又有偷挖金塊人犯。額魯特等毫無覺察。不免另有情弊。總管車伯克、佐領莽租、派往巡查。亦未勘出。尤屬可疑。車伯克、莽租、均著革職。交祥保嚴審。儻有貪贓舞弊等事。即行定擬具奏。並著詳訊挖金人犯。究係由何處行至布呼圖山地方。即將該失察駐卡官員叅奏。此事由祥保風聞查拏。其自請交部察議之處。即著寬免。愛新布著交部察議。再新疆滋事人犯。向有改發伊犁塔爾巴哈台、喀什噶爾等處之例。惟此等偷挖金塊人犯。若均改發喀什噶爾等處。恐仍不免紛紛逃遁。復往產金地方偷挖滋事。著晉昌、祥保、將嗣後此等滋事人犯。或改發內地烟瘴地方。或改發東三省之處。會同覈擬具奏。【『仁宗實錄』卷230 嘉慶15年6月甲申(1日)】

■36.の記事の内容も封禁地帯の金山における不法盗掘の取締りに関する、いわば治安維持の側面をもつものである。「東三省之處」と明記されているように、この記事でも、地域呼称あるいは三將軍管轄下の行政領域の呼称として「東三省」の語が用いられている。

■37. 乙丑。論内閣、前因御史韓鼎晉奏稱、關東三省賭風甚熾。已降旨飭令觀明等嚴行查禁矣。本日召見榮麟、朕因其曾任盛京侍郎。詢以此事。據稱盛京地方聚賭者頗多。甚至協領佐領等官、亦俱開局賭博、從前富俊認真查拏、稍寬斂跡、然尚不能根株淨盡等語。盛京為陪都重地。風俗素稱淳樸。豈容棍徒誘賭。致旗民子弟紛紛效尤。轉荒本業。非嚴肇重懲。不能除莠安良。著觀明遵照前旨嚴肇辦理。務絕根株。富俊前在盛京將軍任內辦理濫務。因受局員朦蔽。致官獲有攙雜等弊。其餘辦理地方事件、尚屬妥協。嚴禁賭博、尤屬認真。現發往吉林効力。著加恩賞給盛京驍騎校。遇缺即補。隨同觀明當差。即將盛京聚賭匪徒、責成實力查緝。如果辦理認真。能使賭風斷絕。觀明即據實奏聞。朕必加以重恩。並著吉林將軍賽沖阿傳諭富俊迅速起程前往。【『仁宗實錄』卷245 嘉慶16年6月乙丑(19日)】

また、■37.の記事も、清朝がマンチュリアという特殊地域を表現する語として「東三省」（この記事で

は「関東三省」の語を用いているものである。また、上掲■33.や■35.の記事と同様、この記事も、盛京で顕著であった賭博の流行など、「東三省」という地域の本来の風俗が乱れ、旗人を含む「東三省」の人々がその風潮に染まっていくことに対する清朝の強い警戒心を表現するものである。このように、清朝の「東三省」に対する認識は、その地域的な特殊性をその長所として単に強調するものであったのではなく、清朝自身の「東三省」に対するその特殊性は依然として認めながらも、清朝にとっての理想像とはかけ離れた現実も意識せざるを得ないという複雑なものであったと説明すべきなのではなかろうか。

さて、「東三省」の語の持つそのような複雑なイメージは、地域呼称としての「東三省」を表現している上掲の各記事だけではなく、その人的集団を「東三省」の語を用いて表現する記事にも現れている。

■38. 諭内閣、吏部議處和世泰降四級調用、徵瑞降二級調用一摺。又議處徵瑞降一級調用一摺。和世泰於奏請派員查驗茶膳房金銀器皿一事。所開御前侍衛軍內。將阿那保、華聘、安成、蘇爾慎、四人扣除。經朕召見和世泰面加詢問。如係伊等一時疏忽。繕單遺漏。本無大咎。乃和世泰奏稱、係伊不令承辦章京等開入。及詢以係何主見。則稱阿那保等四人、係東三省人、均屬糊塗、即開列亦未必簡派等語。實不成話。和世泰既以明白自命。何以內務府之事。動輒得咎。交審事件。總不能結。伊年輕識淺。甫令學習辦事。正當加意謹慎。輒敢心存自滿。蔑視同儕。漸不可長。意欲何為。且伊遠祖額亦都本係東三省人。國初建立大勳。賞延於世。今和世泰薄視東三省之人。是不但意存狂傲。抑且自忘其本。厥咎甚重。至徵瑞於和世泰辦理此事時。甫自園直班回城。奏單俱已繕定。伊未經詳覈。隨同具奏。咎尚可原。惟伊奏請將索特納木多布齋開墾田租交納廣儲司一事。則紕繆太甚。徵瑞原派管公主家務。其於額附索特納木多布齋產業。即不應干涉。自公主逝後。從前陪嫁之產。朕尚施恩賞給額附。乃伊轉欲將索特納木多布齋自有田租。奏請入官。朕曾有言利之臣朕斷不用之旨。徵瑞竟敢嘗試。希圖取巧見長。實屬卑鄙不知大體。咎無可寬。和世泰徵瑞二人。本應均照部議降調。姑念和世泰年幼無知。徵瑞年老昏瞶。分別量予薄懲。俾知儆懼。和世泰著拔去花翎。革去內閣學士、副都統。實降一級。以三品頂帶、仍留總管內務府大臣之任。徵瑞亦著拔去花翎。革去副都統。實降一級。以三品頂帶、臉留總管內務府大臣之任。和世泰仍帶降二級留任。徵瑞仍帶降一級留任。伊二人所管各處差使。均仍令照舊管理。其和世泰原署左翼總兵。亦令暫署以觀後效。【『仁宗實錄』卷 250 嘉慶 16 年 11 月丙申(21 日)】

■38.の記事には、和世泰という官員が阿那保ら 4 人の「東三省人」を愚かであるとして輕蔑したことに対し、嘉慶帝が、その和世泰の判断を傲慢かつ根本を忘れたよからぬものとみなし、彼を処分したことが記されている。この記事からわかるのは、「東三省之人」であることによって輕蔑の対象になることがあったという点である。

ただ、それに対して嘉慶帝が述べた内容が示唆するように、清朝は自らの根本を象徴するものとしての「東三省」という認識を強く有していたのであって、18 世紀以降の清朝が抱き続けていた「東三省」に対する理想像や肯定的な評価はこの時期にも基本的には変化することがなかったと考えてよからう。そしてまた、以下の 2 件の記事も、清朝のそのような認識を象徴するものである。

■39. 諭軍機大臣等、八旗生齒日繁。京城各佐領下。戶口日增。生計拮据。雖經添設養育兵額。而養贍仍未能周普。朕宵旰籌思。無時或釋。前日舉行大閱典禮。各旗營隊伍整齊。在南苑先期訓練。祇遵約束。朕嘉旗人服習教令。更念養先於教。為之謀衣食者益不可不周。國家經費有常。舊設甲額。現已無可復增。各旗閒散人等。為額缺所限。不獲挑食名糧。其中年輕可造之材。或閒居坐廢。甚或血氣方剛。游蕩滋事。尤為可惜。因思東三省、原係國家根本之地。而吉林土膏沃衍。地廣人稀。聞近來柳條邊外。採蕩山場。日漸移遠。其閒空曠之地。不下千有餘里。悉屬膏腴之壤。內地流民。並有私侵耕植者。從前乾隆年間、我皇考高宗純皇帝軫念八旗人衆。分撥拉林地方。給與田畝。俾資墾種。迄今該旗等甚享其利。今若仰循成憲。斟酌辦理。將在京閒散旗人。陸續資送前往吉林。以閒曠地畝撥給管業。或自行耕種。或招佃取租。均足以資養

贖。將來地利日興。家計日裕。該旗人等在彼儘可練習騎射。其材藝優嫺者、仍可備挑京中差使。於教養之道。實為兩得。著傳諭賽沖阿、松寧、即查明吉林地方。自柳條邊外、至採獲山場。其間道里共有若干。可將獲場界址移近若干里。悉數開墾。自此以外。所有閒曠之地。計可分贍旗人若干戶。並相度地勢。如何酌蓋土銕草房。俾藉棲止。其應用牛具籽種。每戶約需若干。再該處現有閒散官員。是否足資統束。抑或須增設佐領驍騎校之處。一併詳細妥議章程。並繪圖貼說具奏。候朕酌度。或先派旗人數百戶前往試行。俟辦有成效。將來即可永資樂利。此事經營伊始。該將軍等毋得畏難觀望。盡心籌畫。以副委任。將此諭令知之。【『仁宗實錄』卷 256 嘉慶 17 年 4 月甲辰(2 日)】

■40. 諭內閣、東三省為我朝龍興之地。因吉林、黑龍江、二處地氣苦寒。從前定例、將獲罪人犯、發往該處給兵丁等為奴。昔時人數有限。到配後尚易於管束。近緣廣東福建等省、辦理洋盜會匪等案。將夥犯情重者俱照擬發往。人數積至數千名以外。該處兵丁歲支錢糧。本有定額。祇敷養贍身家。今發給為奴者。日增日衆。責令收養。其生計必愈形苦累。且該處習尚淳樸。此等為奴之犯、大率皆兇狡性成。百千羣聚。故習未悛。甚或漸染風俗。於根本重地。尤屬非宜。甚有關繫。著刑部即速詳查該二處、現在業經到配為奴之犯。共有若干。此內覈其在彼年久者。量減軍流。分別改發烟瘴極邊等處。其到配未久未便減等者。即著改發新疆。並著改定條例。嗣後各省案犯有例應發遣該二處為奴者。量為區別。酌留數條。其餘如洋盜會匪、人數較多之案。均酌擬改發新疆、及烟瘴等處。奏明條款。纂入律例遵行。【『仁宗實錄』卷 264 嘉慶 17 年 12 月庚子(1 日)】

■39.と■40.の2件の記事でいずれも、「東三省＝清朝の根本重地」とする表現が用いられている。特に、■40.の記事からは、清朝が「東三省」の地の維持を図るため、流刑者の送致先を別の辺境地域に変更する試みも窺えるが、ここからは、「東三省＝清朝の根本重地」の語句が、清朝のマンチュリアに対する理念・理想像を込める際のそのキーワードとして用いられていたことがみて取れよう。また、こうしたキーワードとしての「東三省」の語は、地域としての特殊性を説明する記事だけではなく、以下のような、人的集団としての「東三省官兵」あるいは「東三省人」が有する長所や特殊技能を強調する記事にもしばしば現れている。

■41. 又諭、富俊奏、請定内外臣工三年更調、並禁止奢靡、講求武備各款。國家簡用臣僚。量能器使。其職事修廢。必隨時甄覈。若概以三年為期。其稱職之員、正資整頓。何必亟於更調。其不勝任者。又安能曲為姑容。待其限滿乎。所奏殊於吏治無裨。至士民婚喪謙勞。自應稱家有無。隨宜成禮。無如人情競尚浮華。見侈靡者羣相歆羨。轉以儉質者為非。遂至貧富相耀。取非其有。靡所不為。敝習相沿。伊於胡底。著八旗及直省大員、善為化導。使人人知禮讓為先。廉恥為重。一切鮮衣美食。綈節繁儀。俱無足貴尚。庶崇實黜華。風俗人心。可冀日臻淳樸。其兵丁操演弓力。當以挽強為尚。縱不能悉挽八力以上。若六力則頒諸令甲。著八旗護軍前鋒健銳等營、嗣後挑缺揀選。務以六力弓為合格。其不入格者。毋許濫充。至東三省官兵技藝優嫺。實堪嘉予。此次調赴軍營各官兵。俟凱撤回京之日。著御前大臣、領侍衛內大臣、會同挑留二三百員名。分派京城各處當差。以收相觀而善之益。並著該大臣等每屆五年、奏請挑送一次。即以此次為始。著為令。【『仁宗實錄』卷 280 嘉慶 18 年 12 月辛丑(8 日)】

この■41.の記事は、官僚の綱紀肅正や儉約の奨励、社会風俗の安定や武芸の鍛錬などを嘉慶帝が命じたものであるが、ここでは「東三省官兵」の技能の高さへの評価が引き合いに出されている。また、続く1件の記事は省略するが、その次の記事にも「東三省」出身者の技能の高さが示唆されている。

■43. 又諭、前經降旨令紫禁城各門進班官兵內、添派東三省數人、原因該處之人、技藝熟習。在各門當差。於事有裨。嗣召見永琮、西拉布、瑞齡、問及。俱奏稱、各門均有三省之人。昨派蘇爾慎、安成、往查。惟景運門有一護軍校。東華門有一護軍。其餘各門俱無。甚屬非是。朕前令添派該處之人者。並非專指新到京之人而言。即在京居住二三代者。亦係其人。永琮等未悉此意。於見面時妄奏。均有不合。…(後略) 【『仁

宗実録』卷300 嘉慶19年12月辛未(15日)】

この■43.の記事からは、北京の紫禁城内に警備を司る者として派遣されている官兵には必ず「東三省之人」が派遣されることになっており、その理由として、「東三省之人」が技芸に習熟していることがみて取れる。ここにも、清朝の「東三省人」に対する高い評価をみて取ることができよう。

繰り返しにはなるものの、もちろん、清朝は盲目的にその語に自らの理想像だけを込めつつ、「東三省」の語を用いていたわけではなかっただろう。清朝は、「東三省」の語に投影させようとした理想像と、それに反する現実との間の隔絶を確実に理解していたはずである。清朝による「東三省」の語の使用は、その隔絶に対する確実な理解の上になされたのであって、その点からみれば、清朝が「東三省」の語を用いている記事の多くは、マンチュリアにおけるその現実を描写する文脈の中でではなく、むしろそれとは逆に、清朝の「東三省」に対する理念的認識を表現する文脈の中で「東三省」の語を用いるものであったとも言えるのではなかろうか。そのことは以下の各記事からも確認できる。

■44. 丙申。論內閣、盛京、吉林、黑龍江、三省。自國初以來。本無官拴馬匹。上年朕親詣陪都。亦未見該處有缺馬情形。迨回京後。經誠安奏稱伊奉使吉林。與賽沖阿、松寧、會商東三省馬匹短少。欲懇請添設官馬以裕差操。賽沖阿等未及具摺。伊特於召對時面陳。其時適有年班到京之將軍德寧阿、祿成等、或生長其地。或莅官其省。經朕詳加詢問。並向籍隸東三省之侍衛等、逐加體訪。或以為應行加設。或以為無庸增添。其說不一。隨降旨令賽沖阿、富俊、松寧、三人酌議。嗣據賽沖阿奏請盛京各城添設馬一千匹。松寧奏請黑龍江添設馬二千匹。富俊奏稱吉林兵丁、皆有孳生馬匹打牲為業。並無不能騎馬之人。朕以三省所議兩歧。令富俊再議。富俊始有裁撤大凌河馬羣、分撥各處之議。察富俊之意。亦明知大凌河馬羣為不可裁。強為此說。其意仍主於無庸增設。因交軍機大臣、與英和、松筠、和寧、會同兵部妥議具奏。茲據托津等十二人會議。奏稱東三省添設官馬惟有添至數萬匹。庶可布置周妥。而經費有常。斷難輕議。若但抽添三四千匹。兵多馬少。實屬無益。不若仍循其舊。朕因明亮、和寧、俱曾任東三省將軍。且歷練營務。復加面詢。伊二人俱以為添馬事屬難行。即戴聯奎、曹師曾、亦面奏不如仍舊。惟松筠單銜奏請盛京添棚馬一千匹。吉林添棚馬六百匹。黑龍江添棚馬四百匹。較賽沖阿等請添馬數更少。亦於操練何裨。朕辦理庶政。執兩用中。善鈞從衆。所有東三省官拴馬匹一事。竟可無庸辦理。仍循舊章。以安本俗。將此明白宣諭賽沖阿富俊松寧知之。

【『仁宗實錄』卷355 嘉慶24年3月丙申(4日)】

■45. 庚午。論內閣、昨因侍衛處清文、俱令書吏代寫。已將該處書吏逐出。特降諭旨、嚴飭在京各部院衙門、如有代寫清文書吏。俱著逐出。因思京中各處既有書吏代寫清文。則東三省、及各省駐防滿營、難保無代寫清文書吏。此等習氣。自應嚴禁。著通諭東三省及各省駐防等處將軍、都統、副都統、城守尉等、詳查如有此等書吏、即行逐出。務令旗人學習清文。凡有清字。俱令自書。斷不可令書吏代寫。【『仁宗實錄』卷358 嘉慶24年5月庚午(10日)】

■46. 又諭、本日召見盛京副都統富祥、詢及該處演圍情形。據稱每值演圍、派兵一千名隨往、向例圍畢、每兵一名、交鹿一隻、鹿尾兩箇、兵丁等恐交不敷額、雇覓毆手數百人、用鎗打逸出鹿隻、賣給兵丁交納、此項毆手、均由將軍衙門發給印票隨往、以備鎗打圍外逸獸、如有虎熊、亦用鎗打等語。行圍一事。原為滿洲操演技藝而設。東三省滿洲騎射。本屬優良。向以打牲為業。今吉林黑龍江兵丁行圍。仍於馬上射獸。盛京兵丁、竟致雇覓毆手用鎗擊打。殺虎亦不用槍刺。只用鳥鎗。其技藝迥遜於前。已可概見。前以用鳥鎗擊虎。曾蒙皇考高宗純皇帝慮及滿洲等舊業廢弛。特降諭旨訓示。朕亦曾降旨飭禁。今日久懈生。不惟用鎗擊獸。甚至殺虎亦雇覓毆手施放鳥鎗。若不嚴禁。日後不惟馬上技藝廢弛。並恐該兵丁等既不能施放鳥鎗。亦不能執用長槍。則滿洲之技藝失矣。況兵丁等雇覓毆手。即屬私弊。若由將軍衙門發給印票。豈非該將軍大臣等通同作弊耶。…(後略) 【『仁宗實錄』卷365 嘉慶24年12月辛亥(23日)】

■44.の記事は、元來は八旗がそれぞれに馬を保持していた「東三省」において、官馬を円滑に調達す

る新たな方法について検討しているものであるが、嘉慶帝は、官馬の円滑な調達を求める官僚側からの制度変更要求を建国以来の伝統によって退け、■45.の記事でも、「東三省」における満洲旗人の軍営から満洲文の翻訳人・代書人を追い出し、満洲旗人自らが満洲文を用いて書類を作成するよう命じ、さらに■46.の記事では、盛京官兵が巻狩りの演習（「演圍」）を弓矢によってではなく銃を用いて行うようになっていく風潮があることを戒め、従来通り技芸に励むよう命じている。

このように、嘉慶帝は、「東三省」におけるこうした現実の変化を十分承知していたものの、ただ、その現実に適するように自身の認識を変更しようとしたのではなく、逆に、清朝自らが18世紀以降強調し続けてきたような「東三省」に対する理想像や特殊な認識を依然として維持しようとし、その認識を表現する語の一つとして「東三省」の語を用い続けたと説明できよう。『清実録』が清朝によって編纂された史料であるのだから当然ではあるが、嘉慶年間における「東三省」の語も、マンチュリアに徐々に現れてきた現実の変化を直接的に象徴している語というよりはむしろ、当時の清朝のマンチュリアに対する認識自体を表現する語の一つであったと理解しておくべきなのではなかろうか⁷。

（三）小結

以上、些か長くなったが、嘉慶年間の『清実録』の中の、「東三省」の語が用いられている記事の全てを紹介・分析してきた。些か推論に止まるところもあるかもしれないが、以下まず、これらの各記事の中の「東三省」の語の用例・用法の特徴について纏めておこう。

まず、用例の件数や用法・内容に関する特徴についてであるが、嘉慶年間の記事の中で「東三省」の語が頻出するのは反乱とその鎮王に関係する記事であるという点が挙げられる。もちろん、反乱の鎮王のために「東三省」の軍隊が投入されたことがその主な理由であろうが、それらの記事の中には、その「東三省」の軍隊の有能さ・強靱さを強調する表現を含むものが多い。因みに、反乱鎮王のために投入された有能かつ強靱な「東三省」の軍隊、というその文脈は、前稿で指摘したような、18世紀の乾隆帝による「十全武功」の際の「東三省官兵」に関する記事の中の文脈ともほぼ軌を一にするものと思われる。ただ、18世紀の記事とは違い、嘉慶年間の記事の中には、「東三省官兵(人)」というその人的集団の有能さ・強靱さだけでなく、その緩みに対する警鐘を併せて記すものも徐々に多くなってきている。

また、「東三省」の語を直接的に人的集団を意味する語ではなく、マンチュリアの地域呼称として意味づける用例・用法もいくらか散見されている。なお、マンチュリアの地域呼称として用いているそうした「東三省」の語の中には、「東三省＝重地」という語句のかたちで出現しているものも多くあり、この点からみて、この時期の「東三省」の語は中国内地各省とは異なる特殊な位置づけを付された地域としてのマンチュリアを象徴する語でもあったと言えよう。ただ、そうした「東三省」に対する清朝の理想像やイメージの裏返しとして、こうした「東三省」の語の中には当時のマンチュリアにおける社会の頹廢状況に対する清朝の懸念もしばしば込められていた。

以上のような点が、嘉慶年間の『清実録』における「東三省」の語の用例・用法にみえる特徴である。とひとまず言えそうだが、では、各記事で用いられているそのような「東三省」の語の用例・用法は、嘉慶年間における清朝の「東三省」に対する認識を如何なるものとして説明し得るであろうか。

上掲の各記事においては、「東三省官兵(人)」を反乱鎮王に投入したその動機・前提として、彼らが有能な軍団であった点が強調されているように、清朝は、盛京・吉林・黒龍江出身の官兵の有能ぶり・強靱ぶりを強く認識し続けていた。ただ、その一方で、嘉慶年間後半期の各記事の中で、「東三省官兵(人)」

という人的集団の緩みや「東三省」という地域における頽廃状況に対して警鐘を打つような記事も多くなっていることを併せて勘案すれば、この時期の清朝の関心が、中国内地の反乱鎮王のためのその手段の一つとしての盛京・吉林・黒龍江三將軍管轄下の人的集団たる「東三省官兵」自体に対してだけでなく、反乱鎮王後に露見しつつあった彼ら人的集団と彼らを育成する地域や社会の頽廃的な状況に対しても徐々に向けられるようになっていったという説明が可能になるのではなかろうか。

因みに、「東三省」の語が、その社会的な風潮の乱れやそれに伴う「東三省人」の劣化を表現する文脈や、漢人移民の増加の状況を表現する文脈において多用され始めている背景には、もちろん、マンチュリアにおける社会的な頽廃状況や漢人移民の増加といった「満洲の漢化・中国化」という現実があったはずであるが、ただ、にもかかわらず、「東三省」の語自体はこの嘉慶年間の「満洲の漢化・中国化」という現実を直接的に、かつ客観的に表現する語に転化したわけではなかった。マンチュリアにおける社会的現実に対する理解・把握の一方で、清朝はなおも、その「東三省」の語の中に18世紀以来の盛京・吉林・黒龍江出身の人的集団やその出身地たるマンチュリアの優越性・特殊性を含め続けていたのである。その点で、「満洲の漢化・中国化」という現実が差し迫りつつも、清朝のマンチュリアに対する基本的な認識には18世紀のそれと大きな違いはなかったものと言えよう。

清朝にとっては、この時期のマンチュリアは依然として有能な人的集団の出身地であり、その出身者は武芸に秀で、中国内地の武人集団とは異なる有能かつ強靱な人的集団であるべきであった。もちろん、マンチュリアには緩慢さの目立つ現実も生起して来つつあったが、マンチュリアに生起してきたこうした現実の裏側で、清朝はマンチュリアにおけるその社会的現実（すなわち「満洲の漢化・中国化」）をそのままに受け入れたのではなく、むしろ、そうした現実を理解した上であつてもなお、マンチュリアを清朝にとって相応しい地域としてイメージしようと試みたと考えるべきであろう。各記事の中で「東三省」の語が「重地」の語と併せてしばしば用いられているのは、清朝が現実のそのマンチュリアではなく、あるべき理想的な地域としてのマンチュリアをより強く認識していたからではなかろうか。

（2）道光年間における「東三省」の語の用例・用法

では、嘉慶年間に続く道光年間(1821-1850)には、「東三省」の語の用法に何か大きな変化はみられるのであろうか。本節では前節に引き続き、道光年間の『清実録』『宣宗実録』の中の「東三省」の語が用いられている各記事を紹介・分析していこう。なお、前節と同様、各記事の分析の際には、その各記事の内容・文脈に加え、「東三省」の語にみられる清朝の認識・評価のありようにも注目していきたい。

■48. 諭内閣、嘉慶十九年。曾將各護軍營之東三省人內。酌派護軍數名。附入圓明園。與各護軍一體當差。現在圓明園所餘東三省人亦無多。伊等久居京城。忽移別處。不但差務不甚熟習。且於伊等生計。亦多未便。著交京城之八旗護軍營。嗣後遇有本旗護軍缺出。即由圓明園護軍內。將東三省人調補。所調圓明園護軍之缺。仍照向例將本營馬甲挑補。如護軍營本旗護軍無缺。所有挑補圓明園護軍之東三省人。仍留該處護軍錢糧當差。不必豫行開缺。【『宣宗実録』卷16 道光元年4月甲申(4日)】

■48.の記事は、これまで円明園護軍のほうに選抜されていた京師八旗護軍營の「東三省人」をその他の護軍とともに北京以外の地に派遣するかどうかの判断についてのものである。この記事には、その人数も乏しく、また、彼らは長年北京にいたために外地派遣にも長けておらず、かつ彼らの生活にも支障を来すため、これ以後は、円明園護軍に選抜されている「東三省人」はその他の護軍のように外地に派遣することはせず、京師八旗護軍營の欠員が出た際に彼らを優先的に充てることを命じたことが述べら

れている。

■49. 辛丑。命整飭内外旗營訓練。諭内閣、朕恭閱嘉慶五年皇考仁宗睿皇帝實錄。內載國家設兵。原以衛民。全在平時操練。方能得用。第承平日久。文恬武嬉。各營伍將弁。往往自耽安逸。竟不以操練為事。而該管上司又復不加察查。以致日漸廢弛。著各該督撫提鎮。務須隨時認真操練。使之技藝嫺習。悉成可用之兵。以飭營伍而重巡防等因欽此。仰見我皇考聖慮深遠。有備無患之至意。因思我朝開創之初。八旗軍鋒所指。無不克敵制勝。厥後統一寰區。武功著定。外而各省。亦俱建立營伍。分防駐守。鉅法良規。盡美盡善。溯查乾隆年間西陲用兵。兩金川平定。八旗勁旅。最為得力。人才亦復輩出。此後嘉慶初年。三省教匪滋事。全賴聖謨廣運。克奏膚功。八旗官兵打仗出力者。固不乏人。究未能全數收其實效如昔日者也。皆由管領教練之人。平時漠不關心。因循懈弛。坐令國家有用之兵。日就荒廢。深為可惜。更堪憤恨。如健銳火器兩營。操練本屬認真。遇事亦能得力。然近日風氣。亦不逮從前遠甚。至於前鋒護軍諸營。亦非從前可比。而滿蒙漢二十四旗之兵。更難過問矣。雖一切情形。不能與健銳火器兩營並論。然亦不可藉此推諉。視為具文。甘為廢棄。其東三省官兵。原屬驍健。乃根本之地。更不可稍形荒廢。嗣後該管王大臣等務須遵照舊規。加意操練。何人某項技藝優長。何人馬上最為嫺熟。全在平日留心分別記憶。或隨時量加鼓勵。或升轉秉公拔擢。…（後略）【『宣宗實錄』卷25 道光元年10月辛丑(24日)】

この■49の記事は、道光帝が八旗軍營における訓練の徹底を命じたものであるが、乾隆年間までの旗人の武功という輝かしい過去を強調する一方、彼ら八旗兵の頹廢状況に対する憂慮も窺える。この記事では、道光帝が「東三省官兵」の本来的な有能さを認めつつ、その彼らの出身地たる「東三省」の地が荒廃せぬよう鼓舞しているが、このことはすなわち、道光帝が「東三省官兵」の有能さを確かに認識していたものの、その一方で、マンチュリアで旗人の頹廢が拡大するおそれのあることも確かに諒解していたということであって、この記事からも、清朝が「東三省官兵」の有能さとマンチュリアにおける現実社会の頹廢というその隔絶状況についての認識を強く持っていたことを確認することができよう。

■51. 署陝甘總督朱勳覆奏操演情形。得旨、認真訓練。斷不可稍形廢弛。第一賞罰公平。使皆樂於從命。是為至要。各項技藝。務期精純可用。慎勿徒尚虛文也。又奏、向來綠營兵丁。步箭三四力弓居多。馬弓則不過兩力。臨陣不能殺賊。即技藝嫺習。亦屬無益。批、現在除東三省外。皆染此習。可惡之至。…（後略）

【『宣宗實錄』卷28 道光2年正月丙辰(10日)】

続く1件の記事は省略するが⁸⁾、上掲のこの■51の記事には、清朝正規軍のうちの綠營兵の無能さが指摘されており、道光帝がその惨状に強く憂慮していることを確認することができる。因みに、この記事の中の「東三省」の語は「東三省」の人的集団を指すものと考えられるが、この記事では、綠營兵の無能さとの比較対象として「東三省（兵丁）」が採りあげられており、道光帝は、その「東三省（兵丁）」を他地域の軍營の兵士とは一線を画す、唯一悪習に染まっていない人的集団としてそれを認識している。すなわち、あるいは願望に近い認識であったのかもしれないが、道光帝はこの時点でも、「東三省（兵丁）」の有能さを確かに認識していたものと言ってよからう。

ただ、こうした道光帝の、願望にも似た認識の一方で、この頃には、兵制面における不備などの現実と、そうした現実を背景とした制度変革の要請が次第に頻出するようになってきていた。ただ、この時点でもなお、「東三省」の各官僚からのその変革要請は、道光帝が抱いていた「東三省」に対する基本的な認識とは食い違っていたため、ほぼ却下されることになった。■52.と■53.の記事がそのようなものとして挙げられよう。

■52. 丙戌。諭内閣、軍機大臣等議駁、誠安奏請添設東三省官馬一摺。東三省向無官拴馬匹。誠安等曾於嘉慶二十四年奏請添設官馬。當交大學士托津等會議。以事屬無益。業經奉旨飭駁。茲該都統復請於江寧等處

駐防、及江浙等八省綠營。抽撥馬匹。交東三省立棚餵養。江浙等省陸路差防。亦資馬力。舊制本屬無多。加以近年屢經議減。豈可復議裁撥。至荊州等駐防兵丁。皆係滿洲蒙古。舊設馬匹。即無數餘。若遽行抽撥。該兵丁轉無以備騎操之用。至東三省前鋒馬甲。不下四萬餘名。向係自行立馬當差。今若僅添官馬數千匹。散交各城。不惟分布難周。且恐無馬之兵。遇差推卸。如專在省城合棚餵養。各城散處兵丁。取給未便。仍於騎操無益。且餵養馬匹。若不設立專營。添派管轄官員。則事無專責。諸弊叢生。於馬政必致有名無實。該都統所奏。著無庸辦理。【『宣宗實錄』卷29 道光2年2月丙戌(10日)】

■53. 諭軍機大臣等、據伯麟奏、會議誠安條奏東三省添馬事宜。已另摺議駁。因詢悉黑龍江所屬打牲索倫達呼爾。每年例交貂皮。全資馬力。近日無力買馬。艱於射獵。所有例交貂皮。往往折銀購買。甚為拮据。請仍照雍正年間成案。由大凌河酌撥孳生馬匹。為打牲之用。儻該處另有別項情形。窒礙難行。亦須另籌他策。妥為調劑等語。索倫達呼爾等處。每年按丁交納貂皮。由來已久。其呈進時。沿途既有例支口糧。揀驗後。復給與價銀。何致遽行苦累。至該索倫達呼爾。向有給與孳生馬匹。嗣因陸續倒斃。責令賠補。力有不逮。經都爾嘉等。奏請將現有馬匹。全行變價。是當時裁去該處孳生馬匹。原為調劑伊等賠累起見。今伯麟以索倫達呼爾生計拮据。每年有例交貂皮之累。復以添立孳生馬匹為調劑。是否今昔情形。果有不同。抑仍有窒礙難行之處。著松霖秉公詳察。據實覆奏。伯麟摺著鈔給閱看。將此諭令知之。【『宣宗實錄』卷29 道光2年2月丙戌(10日)】

この2件の記事は、いずれも嘉慶年間末に要請があったものの却下された、「東三省」における官馬の管理・育成に関する制度変革の再燃について述べたものである。■52.の記事は、中国内地の各駐防や綠營における官馬供給のために「東三省」を含めた各地での官馬育成を再び求めたものの、その要請が却下されたことを述べており、また、■53.の記事は、黒龍江の辺民らが進貢を行う際の輸送馬の不足を補うために「東三省」での官馬育成を必要とするという官僚からの要請に対し、道光帝がその現状認識を疑い、さらなる調査を命じたことを述べているものである。このように、「東三省」における官馬の管理・育成のための制度新設の要求が各官僚から繰り返し提出されながら、その要求が道光帝にも悉く却下されていることに鑑みれば、道光帝が、嘉慶帝と同様、マンチュリアにおける様々な動揺を認識していたものの、「東三省」における従来からの制度は変更しないとする基本姿勢をなおも貫いていたことを指摘し得るであろう。

■54. 黒龍江將軍奕額等覆奏操練章程。得旨、東三省乃我朝根本重地。土馬馴熟。甲於天下。一切操練。斷不可沾染綠營習氣。工於式樣架勢。總以強壯便捷為要。而弓箭鳥槍。又以馬上嫺熟者為要。如此則不失我滿洲舊風也。…(後略) 【『宣宗實錄』卷29 道光2年2月戊子(12日)】

この■54.の記事にも、上掲■49.などの記事と同様、中国内地の綠營とは違い、優秀とみなす道光帝の「東三省官兵」観が強く表れている。また、「東三省」の地も、中国内地とは違い、満洲人の伝統的な風習を維持すべきその地域として認識されていたことがこの記事からも確認できる。

■55. 辛未。諭內閣、富俊奏、書院教讀乏人、請改發廢員一摺。據稱吉林向有白山書院。八旗及民籍子弟。俱在內肄業。僅聘本地諸生教讀。難收實效。請將發遣廢員馬瑞辰、改發吉林。專司教讀。所奏實屬謬悠之見。東三省為我朝根本之地。原以清語騎射為重。朕屢次申諭。總期崇實黜華。弓馬嫺熟。俾知共守淳風。富俊係滿洲大員。且在東三省年分最久。於該處旗民本計。自應遵照舊規。實力講求。方為不負委任。乃議課生徒。學習文藝。必致清語日益生疏。弓馬漸形輟弱。究之書院仍屬具文。於造就人材毫無裨益。是舍本逐末。大失朕望矣。況馬瑞辰係發遣黑龍江充當苦差之員。何得率請改發吉林。俾司課讀。所奏斷不可行。富俊著傳旨嚴行申飭。【『宣宗實錄』卷37 道光2年6月辛未(29日)】

この■55.の記事からも、マンチュリアの社会が変動しているとの認識に基づく「東三省」の官僚からの制度変革の要請と、道光帝の持つ基本的な「東三省」観との隔絶が窺える。この記事では、満洲人大

官の富俊が外地の教員を招いて吉林の書院教育を行うことを提案しているが、道光帝は「東三省」の特性を理由に、逆にその提案を批判している。この記事が象徴しているのは、嘉慶年間末期と同様の、清朝の「東三省」に対する理念的な認識とマンチュリアにおける現実の頹廃状況との隔絶であると考えられるが、これまでのその他の各記事の内容も併せて鑑みれば、その隔絶を縮小しようと試みる清朝(道光帝)の意図が理念としての「東三省」のイメージを強化し、そのことを象徴するものとして「東三省=根本重地」という表現が頻出するようになり、「東三省」の語がその人的集団に対する高い評価やその地域的な特殊性・優越性を表現する文脈の中でさらに多用されるようになった、とも説明できるのではなかろうか。

■56. 又諭、松霖等議奏、齊齊哈爾城操練鳥槍、毋庸挑取甲兵、撥歸火器營專管一摺。所議是。前因奕額等奏黑龍江各城操練章程。請於齊齊哈爾八旗甲兵內。挑取四百五十名。撥歸火器營、專事操練鳥槍。經朕降旨。令松霖等悉心妥議。茲據該將軍等奏稱、齊齊哈爾城八旗。額設甲兵。平時以農戩打牲為業。遇有巡查邊界。坐卡運糧各差使。輪流派委。所有額設鳥槍四百五十桿。向由甲兵內挑撥。於春秋例操時演放。並令兼習騎射。仍歸各旗一律當差。若撥歸火器營專管。各兵別無長技。於差遣恐致不敷。自屬實在情形。東三省官兵。首重騎射。鳥槍為行伍利器。均宜練習。惟歷來俱係勻派操演。兵丁兼攻羣藝。於武備自有裨益。又何必更改成規。轉致有名無實。該將軍等務督飭該管員弁。隨時認真訓練。分別勸懲。俾各兵弓馬既能嫺熟。即施放鳥槍。亦多中準。洵可成勁旅而資捍衛。奕額等請挑甲兵撥歸火器營之處。著毋庸辦理。至黑龍江墨爾根城、呼倫貝爾、原設鳥槍三處。亦著照舊行。【『宣宗實錄』卷42 道光2年10月壬寅(1日)】

この■56.の記事にも、上掲■54.の記事と同様、嘉慶年間末期以来の清朝の「東三省官兵」観が強く表れている。この記事では、道光帝が満洲人の伝統的な風習を維持すべき「東三省」において重火器を拡充しようとする制度変革に強く反対し、官僚からのその要請を却下している。

■57. 諭軍機大臣等、本日據圖圖善等奏、請飭催各省動撥未解銀兩。道光四年分。東三省需用官兵春秋二季俸餉等款。因庫存不敷。准其在浙江、湖南、山東、山西、九江關、潯墅關等處。湊撥銀一百一十萬兩。俾得豫備支放。茲該副都統等稱、接到部文之後。三次飛催。迄今尚未解到。現將烏拉打牲應領俸餉。全行發給。吉林、黑龍江、應領俸餉。均先發給一半。以資來歲春季散放之需。此外尚有採買直隸糧米。及應給盛京春季各城秋季俸餉等項。需用甚急等語。著各該撫監督等、接奉此旨。即查明前此飭撥之款。曾否全數批解。如尚未起解。著迅即委員。照數解往盛京。並著知會沿途經過各地方。妥為接護。催令趲程前進。一到直隸。蔣攸銘即加派委員。同解往盛京交收。毋稍延宕。致誤要需。將此諭知各該撫、傳諭監督等。並諭蔣攸銘知之。【『宣宗實錄』卷63 道光3年12月甲子(30日)】

さて、この■57.の記事には、これ以前の『清實錄』の記事の中には現れてこなかった新たな状況が描写されている。それは、「東三省官兵」に対する俸餉が不足するようになったことと、「東三省」の將軍らとその不足の状況を改善し、彼らの俸餉を補填するために中国内地の各省・各常関からの支出を要請していることである。また、この記事からは、その補填に使われるべき銀兩がまだ「東三省」には届いておらず、「東三省」の將軍らがあらためて急ぎ要請する様子も窺える。因みに、筆者は以前、別稿にて光緒年間初期(1870年代半ば)に盛京で問題となった財政問題について論じたことがあるが、そこでの議論に引き付けて言えば、この記事は19世紀後半のマンチュリアにおけるその財政問題の端緒となる記事であると言えよう。だとすれば、この記事を分析する際には、この財政問題にも引き付けつつ深く分析していく必要があるかもしれないが、ここではさしあたり、この記事の中にその端緒がみえているということの言及に止めておきたい。

次の記事に対する分析は省くが¹⁰、嘉慶年間の末期から道光年間の初期にかけては、新疆のカシュガル

でジハーンギール・ホージャの反乱が起こっていた¹⁾。「東三省」の語が用いられている以下の各記事はいずれも、その反乱の鎮王とその後の善後策に関するものであり、これらの記事からは、前の白蓮教徒の反乱などと同様に、反乱鎮王のために「東三省官兵」が派遣されていたことを確認することができる。

■59.から■67.までの各記事がまずそれにあたる。些か長くなるが、以下、それらを列挙することをお許し願いたい。

■59. 又諭、那彥成奏、兵行日需口糧等項。請旨辦理一摺。喀什噶爾逆回滋事。前經降旨派調東三省官兵。馳往勦辦。所有兵丁日需口糧。按例每名每日給銀五分。不敷食用。據該督奏、若照嘉慶十八年勦辦滑縣匪徒成案。每兵一名。加銀一錢。又未免過多。本年直隸秋收豐稔。物價較為平減。著照所請、每兵准加銀五分。每日共給予口糧銀一錢。以示體恤。【『宣宗實錄』卷 103 道光 6 年 8 月甲子(15 日)】

■60. 辛卯。諭內閣、程祖洛奏、東三省官兵過境。酌加口糧銀數一摺。著照所請、准其照直隸省奏案。每兵加銀五分。每日共給銀一錢。以資口食。該部知道。【『宣宗實錄』卷 105 道光 6 年 9 月辛卯(13 日)】

■61. 諭內閣、前據內務府查出庫存備賞銀令牌一千面。銀獎武牌二萬六千餘面。當交戶部查議具奏。茲據奏請齎發軍營、作為賞需。著將銀令牌一千面。銀獎武牌二萬六千面。交兵部由驛遞交直隸總督、委員迅速解交署陝甘總督轉解軍營。其令牌一項。係當五當十至當三十兩不等。專賞出力得功之官弁。該將軍參贊等刊刻執照。填註該員姓名籍貫。鈐蓋印信。發給各該員。俟軍務完竣。准其按數領賞。東三省及京營官弁、由部庫繳銷牌照。各省駐防綠營官弁、由本省藩庫繳銷牌照。均即如數支領。仍將所繳執照令牌解部。以憑稽覈。至獎武牌一項。每面重三錢至九錢不等。專賞打仗出力之兵丁。按牌實發。毋庸另給執照。… (後略) 【『宣宗實錄』卷 110 道光 6 年 11 月甲午(17 日)】

■62. 諭軍機大臣等、前經降旨令總理糧餉大臣、通盤籌畫各項支發銀數。臺站有無添改裁併。繪圖貼說具奏。備案銷時覈對。茲據戶部議覆鄂山等會籌軍需章程。逐款分晰開單呈覽。朕詳加披閱。其烏魯木齊運送大營口糧運腳等項一款。據戶部奏、七月內英惠會奏撥銀二十萬兩。今兩次咨調一百萬兩。其前調二十萬兩。是否在此。著該署督等查明報部。所調銀兩。係備給運送大營糧餉運腳、及製辦繩袋等項之需。究竟應需若干。著鄂山等妥定章程具奏。其兵丁加增口糧銀兩一款。此次調派東三省官兵。經那彥成以官兵給銀五分。不敷食用。請每日給銀一錢。該署督等援照直督奏准成案。籠統請加。並未分晰。著將東三省兵丁、每日准加銀五分。其各路兵丁、仍照定例支領鹽糧。毋稍糜費。其官兵馬匹出口籌給料草一款。現在戰馬二萬餘匹。已全行買運供支。其運費必倍蓰於兵糧。或於官兵行走時。將本營乾銀。就近官為採買。按臺豫備。似可節省運腳。其抵營以後。應如何撙節辦理。著鄂山等咨明長齡等妥定章程具奏。並嚴飭各糧臺員弁、就近採買料草。以免多糜運腳。並將何處買備若干。運送若干。查明報部備查。… (後略) 【『宣宗實錄』卷 110 道光 6 年 11 月乙未(18 日)】

■63. 諭內閣、長齡等奏、部駁籌辦軍需各款。會同體察情形。熟商妥議。請仍照原議章程。撙節辦理。以昭覈實一摺。此次回疆用兵。遠在口外。一切軍行駐紮供支等事。原與腹地不同。前經戶部以鄂山等所議軍需各款。多與定例不符。逐款議駁。當降旨令該署督等、會商長齡等體察情形。妥酌辦理。茲據逐款確駁。分晰陳奏。朕詳加披閱。如烏魯木齊運送大營軍糧腳費等項。及關內關外供支哈密調撥駐防官兵口糧一款。此項應需撥銀若干。動碾麥麵若干。遽難截數。著俟糧運事竣。再將烏魯木齊前後撥解銀兩用款。及安西肅州等州縣動碾倉米。並伊犁協運兵糧各費。一併分別報銷。又兵丁加增口糧一款。甘肅食物昂貴。口外經行戈壁。買食愈難。東三省兵丁。既於例領口糧外按日加增。所有各路調集征兵。著照東三省一律給發。口內日給銀一錢。口外日給銀一錢。白麪一斤。以示體恤。… (後略) 【『宣宗實錄』卷 116 道光 7 年 4 月丙午(1 日)】

■64. 諭軍機大臣等、長齡等克復喀什噶爾。已經三月。朕無時不懸盼擒獲逆首捷音。今既肇獲奸細巴依莫特

等。擄出逆匪潛通信字。究訊張逆現在木吉地方潛匿。該將軍等派令安福等四人、帶兵二千餘名。出卡掩捕。惟恐兵力尚單。應再於楊芳、齊慎、二人內添派一人。其周志林所帶官兵五百名前往接應。必須聲勢聯絡。期於前敵有濟。楊芳現駐和闐。擄捕零匪。如能迅速調令出卡最妥。或一時不能調集。烏什草路。距喀什噶爾較近。即令齊慎前往會同安福等妥速辦理。伊薩克拏獲形跡可疑之布魯特巴依莫特等四名。突出張格爾遁匿蹤跡。甚為可嘉。伊薩克著加恩先賞給白玉翎管一箇。白玉搬指一箇。大荷包一對。小荷包四箇。以示獎勵。總兵余步雲、追捕和闐逸賊玉努斯。副將胡超、追捕喀什噶爾逸賊左霍爾。悉就捕誅。所辦甚好。余步雲著加恩賞給提督銜。胡超著加恩以總兵即行升用。所有連次打仗受傷陣亡官兵。著查明咨部照例分別卹賞。此時四城已經克復。從逆零匪。擄捕殆盡。逆酋窮蹙逃竄。指日就擒。未便仍留全師。久駐荒徼。虛糜軍餉。喀什噶爾現有該將軍參贊等在彼駐劄。葉爾羌辦事大臣。著派達阿前往署理。巴哈布著署理幫辦大臣。英吉沙爾領隊大臣。著派蘇清阿前往署理。和闐領隊大臣。著派成玉前往署理。史善載暫令幫辦。該三城祇宜酌留官兵鎮撫。無須多兵駐守。著該將軍等悉心籌畫。或將省分較遠之四川省原調續調官兵。酌撤數千名。及東三省官兵三千名內酌撥二千名。派令帶兵大員。先行統帶各回原營。其餘官兵。應先撤若干。酌留若干。該將軍相度情形。一面妥辦。一面奏聞。不必俟奉到諭旨。再令起行。…（後略）【『宣宗實錄』卷 118 道光 7 年閏 5 月乙巳(1 日)】

■65. 己酉。諭軍機大臣等、自六月十六日。接到長齡等奏報。業已兩旬。朕時切懸盼。及至昨日申刻。據長齡等由六百里加緊奏報。急行拆閱。尚非獲逆喜音。覽奏曷勝憤懣。計自喀什噶爾克復以來。距今五月之久。每有奏陳該逆竄逸地方。及偵探追捕情形。總不過藉詞支吾。辦理全無把握。如果實有該匪藏匿地方。飭派官兵回兵跟捕。又得各部落幫同截拏。何至令逆裔此拏彼竄。現計出卡官兵。已八千六百餘名。聲威不為不壯。若不趁此天時未寒。設法即日成擒。轉瞬大雪封山。官兵等豈能久駐卡外。竟成海捕。縱該逆以釜底遊魂。斷不能復肆猖獗。亦恐師出無功。轉令外夷輕視。且此數月之久。虛糜帑項。不可勝計。若再虛詞搪塞。日復一日。不惟卡外轉餉甚難。豈能以無數帑金。盡輸荒徼。該將軍等必須前後熟籌。立定主見。斷不容任意遷延。重取咎戾。楊遇春既已帶兵出卡。正當督拏喫緊之時。即著暫留在彼。俟得捷音。再遵照前旨。先行進關。至成玉、蘇清阿、現隨楊遇春等出卡。亦即暫緩飭令赴任。應否派員前往署理。及達凌阿等署理各城。能否勝任。著遵照前旨。留心察看。據實奏聞。其應撤火器健銳兩營官兵二百餘員名。西安滿營官兵五百餘員名。即著照議減撤回營。以節糜費。東三省及四川省各官兵。前已降旨先行裁撤。著該將軍等酌量情形。陸續撤令歸伍。…（後略）【『宣宗實錄』卷 121 道光 7 年 7 月己酉(6 日)】

■66. 諭軍機大臣等、長齡等奏、喀拉提錦布魯特比來營效順。並卡倫外近日籌捕情形。及保奏各城參贊辦事大臣各摺。朕閱該將軍等所奏。喀拉提錦布魯特比薩底克、既願出力報效。親見張格爾帶數十人。窮蹙逃往達爾瓦斯。何難在彼設法擒獻。乃復遠來卡內送信。始回該部落。與沙伊布依木、商同擒拏。是其狡詐情狀。已屬顯然。即前此各處偵探逆裔潛匿地方。迄無定所。是否該逆竄跡無常。抑係該夷等虛詞搪塞。為嘗試官兵之計。該將軍等不加深究。輒以入告。試問該逆果有確蹤。各部落同心效順。何至四五月之久。竟同海捕。計自克復四城後。虛糜帑項。不可勝數。長齡等不自知籌辦之失宜。仍欲留兵荒徼。俟勦捕得手。再行陸續撤回。豈不思官兵出卡。既不能深入窮追。轉令外夷窺我虛實。啓其輕視之心。所關甚鉅。而轉餉之難。尚屬其次。長齡等接奉此旨。著即將出卡之將領官兵。全行撤回。仍檄諭外夷各部落。以張格爾入卡肆逆。荼害生靈。實為元惡大憝。罪不容誅。現在各部落既多輸誠效順。情願截拏。諒該逆飄泊遊魂。不難擒縛來獻。以邀封賞。大皇帝因官兵出卡駐劄。恐爾恭順各部落。不無驚懼。並恐官兵不無滋擾。特降恩旨。曲加體恤。即將大兵全行撤回卡內。爾等部落。益當勉竭誠悃。商同設法。將逆酋張格爾迅速擒拏。或獻誠軍門。必當奏明大皇帝。照前懸賞格。懋加封賞。該將軍等一面繕發檄諭。一面即將大兵暫留八千名。其餘均即分起凱撤。自楊遇春、楊芳、齊慎、以下將領及御前乾清門侍衛巴圖魯侍衛等。悉令進關。楊遇春仍遵前旨。督押官兵進關後。來京陛見。再回總督之任。楊芳等各回原任。前經降旨將東三省官兵先撤二千。茲亦著全行撤回歸伍。長齡著暫留喀什噶爾。督同各城參贊辦事大臣等辦理善後事宜。並設法擒拏張格爾務獲。

俟一切軍務完竣。再行查明候旨。…（後略）【『宣宗實錄』卷122 道光7年7月甲子(21日)】

■67. 又諭、據福綿奏、接鄂山等咨會。押解送犯阿里雅一名進京。由晉行走。妥為護送。其凱撤各路官兵內。有京營東三省官兵。出陝西境後。或由山西經過。一切須及早籌備。方免貽誤等語。現在解京之逆犯阿里雅。已定由山西行走。著福綿派員護送。並飭沿途州縣營汛。各帶兵役。協同小心押解。至凱撤之火器健銳二營。及吉林黑龍江官兵。昨已降旨令該署督於進關時。即分為二百名一起。間四日行走。經過之陝西河南直隸奉天等省。按起應付。該署督等即遵照前旨辦理。令各州縣將車馬輪流遞送。無庸由山西行走。將此諭知鄂山、徐忻、並諭福綿知之。【『宣宗實錄』卷124 道光7年8月乙未(22日)】

■59.の記事は、「東三省官兵」がこの鎮王のために派遣されたことを記しており、続く■60.から■63.までの各記事は、その派遣時に必要となる兵士への食糧支給に関するものである。なお、この鎮王は清朝軍の優勢のうちに進み、道光7(1827)年初頭には早くも「東三省官兵」の撤退が計画されるようになった。道光7年前半の■64.から■67.までの記事からは、遠方からの援軍ゆえであろうか、あるいは軍費の節約ゆえであろうか、鎮王の進展に伴って、客軍としての「東三省官兵」が四川省などの官兵と共に速やかに撤退するよう命じられていることが確認できる。その「東三省官兵」の鎮王時の投入や鎮王後の撤退の経緯などについてはさしあたり先行研究の指摘に拠ることとしておくが、ここで指摘しておきたいのは、この道光年間初期の時点でも、清朝には「東三省官兵」の有能さや強靱さがなおも確かに認識されており、遠征軍の援軍として充分機能し得るものとして清朝・道光帝の眼に映っていたという点である。

さて、その後も、カシュガルでの反乱に関する記事が続いているが、それらの各記事に対する分析は省き¹²、記事の検討を再び■72.の記事から進めていくことにしよう。■72.の記事は、前の■57.の記事でも指摘されている「東三省官兵」に対する俸餉不足の状況についてのものである。

■72. 諭軍機大臣等、誠端等奏、查出奉天府屬有積年因公動缺各款。請分別著追籌補一摺。奉天府所屬各廳州縣。倉庫積年虧短。現經誠端等提集案卷。徹底清釐。查明各屬共虧銀四萬八千四百六十餘兩。米五萬一千二百八十餘石。查辦甚屬認真。惟既經徹底查明。自應勒限嚴追照例懲辦。若再因循。仍照前任兼管府尹等設法彌補。成何事體。在原虧之員。任意那移。豈能置身事外。而歷任接收各員。並不據實揭報。虛出通關。亦有應得之咎。著誠端等將查出原虧各員。現官他省及已回旗籍者。分別虧數多寡。移咨各該省該旗。按限追繳。如於限內全完。尚可從寬免罪。若再逾限不完。即行嚴參懲辦。其有已經身故者。即著於該故員子孫名下著追。至歷任接收各員。輾轉流交該管知府及府尹等。又未據實覈辦。著查明起自何年何任並在任月日。分別參奏。交部懲處。以儆將來。又據另片奏、東三省官兵俸餉。經部撥奉天府奏銷地丁俸工等銀七萬兩。現止解銀四萬二千六百餘兩。尚未解銀二萬七千三百餘兩。即在現查虧項之內。此時既不准因循籌補。所需兵餉。應如何撥解之處。並著誠端、興科等、另行籌議具奏。將此諭令知之。【『宣宗實錄』卷156 道光9年5月丙辰(23日)】

この記事では、「東三省官兵」に対する俸餉不足の原因が奉天府における倉庫の銀両・穀物の長年にわたる虧欠状況に求められ、その銀両・穀物の欠損を生じさせた管理官の調査と処罰が命じられている。ここからも、道光年間初期、すなわち、1820年代には、「東三省官兵」に対する俸餉不足といった「東三省」における財政問題がすでに顕在化していたことを確認することができる¹³。

■75. 又諭、據寶興等奏、已革伯都訥同知松奎、虧短倉庫錢糧。請旨拏問究辦一摺。已明降諭旨將松奎拏問、前任伯都訥副都統碩德解任、交該將軍等嚴訊矣。東三省倉庫充足。向無虧那之弊。與各省情形不同。此案該革員松奎、現經查出任內墊那虧短銀至九千七百餘兩之多。雖據稱內有民欠銀九百餘兩。及碩德那用採買穀價銀兩。究係一面之詞。必應提集人證。徹底根究。著寶興等秉公嚴訊。務期水落石出。以成信讞。如查明該革員係將已徵銀兩捏為民欠。及事後掩飾情弊。並碩德實有那用銀兩。即一併據實嚴參。毋得稍有回護。

將此諭令知之。【『宣宗實錄』卷 202 道光 11 年 12 月辛卯(13 日)】

この■75.の記事もまた、「東三省」の倉庫の虧欠状況に関する記事であり、ここでもその虧欠の理由を管理官の不正によるものとみなしている。なお、この記事には、「東三省」の倉庫は過去には他省の倉庫とは違ってこれまでは虧欠することはなかった、との言及があるように、この時期にも、「東三省」における財政は清朝全体の財政の中で特殊な位置づけにあるという認識が基本的であったようである。また、視点を変えてみれば、すでに他省では顕在化していたこのような財政問題が、この道光年間になるとマンチュリアにも発生するようになったということも併せてこの記事から読み取れる。

■78. 諭内閣、黑龍江呼倫貝爾之人。身材強健。步射嫺熟。且能施放鳥槍。此朕素所深知。乃昨據前鋒統領護軍統領等、帶領黑龍江呼倫貝爾所遺護軍校二缺、該將軍等擬送正陪之領催等四名引見。弓力較輒。箭枝無準。轉不如在京之滿洲人等。可現該將軍副都統平日未能實心訓練兵丁。而於揀選之時。顯又草率擬送。似此因循日久。地方兵丁技藝。全行廢弛。該將軍等所司何事。殊屬非是。所有將軍富僧德、副都統敦良、副都統兼總管博多歡、俱著傳旨嚴行申飭。惟念程途較遠。伊等俱係貧窶兵丁。其擬正之領催達蘭岱、阿喇布坦、仍補授護軍校。其擬陪之沙木巴、那穆勒圖、仍記名。嗣後該處咨送引見人員內。儻再有此等之人。不惟將該官兵飭回不放。定將該將軍等一併懲處。決不寬貸。將此通諭東三省將軍副都統知之。【『宣宗實錄』卷 244 道光 13 年 10 月庚申(23 日)】

■80. 諭內閣、每遇朕致祭壇廟大典。維時過早。而人數眾多。難於稽察。是以派乾清門侍衛四員。大門侍衛十員。控弦隨扈。當初定制。其意殊深。不僅為壯觀瞻而已。近來由乾清門所派侍衛。尚屬可觀。其由大門所派侍衛。內有朕平日深知其人庸懦。步射生疏。馬上平常者居多。有名無實。大違當初定制本意。嗣後著三旗領侍衛內大臣、擬派此項控弦侍衛。先由東三省侍衛內。將人才出眾步射純熟者出派。儻人數不敷。再由京城侍衛內。將馬上便捷步射熟練者出派。斷不可仍前草率塞責。【『宣宗實錄』卷 262 道光 15 年正月辛未(11 日)】

この■78.と■80.の2件の記事を併せてみると、そこには、「東三省」の人員に対する評価の違いや動揺が窺える。■78.の記事で、本来的には強靱さを誇るべきはずの黒龍江人の無能さが強調されているのに対し、■80.の記事では、北京の侍衛の任用に際しては、依然として「東三省」出身者を優先的に選ぶように命じており、確かに「東三省官兵(人)」の有能さが認識されているようである。

■82. 軍機大臣潘世恩等議覆盛京將軍奕額奏、派員請領官兵俸餉章程。盛京戶部每年豫領東三省官兵俸餉。向係出派庫關防一員、協領一員、前赴部庫關領。惟吉林黑龍江二省應領俸餉。由該省出派協領佐領等官各五六員、豫赴盛京守候。俟領員押解銀兩到奉天時。再行照數發給領回。該二省領員。除例支行糧外。仍日支坐食。歷年應領銀兩。多至一百四五十萬兩。所需拉運車輛。多至五六十輛。長途防護。僅有二員。車多路遠。難以兼顧。請嗣後每年東三省應領俸餉等銀。於吉林黑龍江派出領員到奉天時。由該將軍等覈計各該省應領銀若干兩。即在該二省派出委員內酌撥數員。隨同奉天委員赴部領取。照數分撥。公同防護。其未經派出之員。仍照舊章在盛京守候。統俟領解到奉天後。會同解回。從之。【『宣宗實錄』卷 295 道光 17 年 3 月己丑(12 日)】

■83. 又諭、前據禧恩等奏、請領丙午年東三省官兵俸餉等銀。當交該部議奏。茲據戶部奏稱、黑龍江所屬各處俸餉等項。常年請領銀三十萬兩上下。今該省請領銀三十六萬兩。其因何多至五六萬兩之處。著該將軍迅即查明具奏。尋奏、多領餉銀至五萬六千兩。係歸補乙巳年請領俸餉案內酌提齊齊哈爾城庫備用銀。下部知之。【『宣宗實錄』卷 422 道光 25 年 10 月癸巳(5 日)】

記事内容が多岐にわたることで、その分析が行ったり来たりを繰り返すことになって大変恐縮だが、■82.と■83.の記事のように、「東三省官兵」の俸餉の支給に関する記事はこの道光年間末期に至っても散

見されている。■82.の記事は、吉林や黒龍江の官兵の俸餉を盛京に来て受領する方法に関する記事であり、■83.の記事は、黒龍江官兵に支給する俸餉についての黒龍江將軍からの要求額が通常より多額になっていることを記す記事である。

これらの記事からは、道光年間後半の時期になっても「東三省官兵」の俸餉問題が沈静化していなかったことが窺え、その点に対してはなお詳しい検討を試みる必要があるのだが、ここではその点にではなく、「吉林」や「黒龍江」を「該省」と記すような、マンチュリアにおける地域的枠組みの表現の仕方の問題のほうについて、さしあたり一つだけ指摘を行なっておきたいと思う。それは、「東三省官兵」の俸餉問題に関する記事ではほぼ、「東三省」の各處、すなわち「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」のそれぞれを「省」と記しているということである。このことは、この時期の「東三省官兵」に対する俸餉の基本的な支給単位が盛京(奉天)・吉林・黒龍江のそれぞれであり、また、清朝やその官僚はこの時期にはすでに事実上、盛京(奉天)・吉林・黒龍江のそれぞれを中国内地各省と同様な「省」としても認識する場合があったことを示唆するものであろう。

以上のように、道光年間の『清実録』の中の「東三省」の語を含む各記事を紹介・分析してきた。その分析から確認し得るこの道光年間の「東三省」の語の用法の特徴と、その特徴から窺える清朝の「東三省」観については以下のように纏められよう。

第1に、嘉慶年間とほぼ同様、「東三省」の語が人的集団を意味するものとして用いられている記事が依然として多いという点である。もちろん、ジハーングール・ホージャの反乱に対する鎮王に「東三省官兵」が実際に投入されたことがその一因としてあるだろう。なお、それらの記事からは、その人的集団に対する清朝の認識・評価が嘉慶年間と殆ど変わっておらず、現実にはその頹廢的な状況が確かに認識されていたものの、その有能さ・強靱さに基づく「東三省(人)」の理想的なイメージがなおも強調されていたことを確認することができる。そして、第2に、「東三省」の語を地理的・空間的枠組みを意味するものとして用いている記事でも、「東三省」が漢人移民の移住対象地域に変容しつつあったという現実を十分認識しながらも、清朝はなお「東三省＝根本重地」の語句を多用しつつ自身にとっての理想的な地域としてのマンチュリアを表現しようとしていたことを確認することができる。すなわち、こうした2つの特徴からみて、道光年間における「東三省」の語の用法と、その用法が表現している清朝の「東三省」観は、その前代にあたる嘉慶年間と殆ど変わっていなかったと纏めておくことができよう。

因みに、上述のような2つの特徴は、道光年間最末期のアヘン戦争に関する記事においても象徴的に表現されている。

■87. 諭軍機大臣等、托渾布奏、調防弁兵酌帶健馬等語。所議未見周妥。南人畏馬。固屬不易之論。惟馬隊之得力。全恃馬上兵丁。持有槍箭利器。故一經衝突。賊勢遂好披靡。噶人[逆噶]如果登岸。斷非徒手。其所持各種火器。紛紛轟擊。我之馬隊。手無利器。何以抵禦。若被擊退回。不但後面步兵。必遭踐踏。且馬隊在前。我之步兵從後施放槍礮。既不能擊中噶人[逆噶]。而倉卒之間。馬隊轉致誤擊。況綠營之馬隊。本不若東三省矯健。加以馬上更無長技。又何所恃以禦敵。種種窒礙。實非攻勦善策。所有托渾布請酌帶健馬之處。著再行悉心另籌。以操勝算而資得力。將此諭令知之。【『宣宗實録』卷368 道光22年2月辛丑(22日)】

■87.の記事はアヘン戦争における清朝の対応を論じた記事の一つであるが、この記事の中でも緑營の馬隊にはない「東三省馬隊」の有能さ・強靱さが強調されており、アヘン戦争時期においても、清朝の「東三省」観には大きな変化がなかったことを窺うことができる。

また、そのような清朝の「東三省」観を象徴する別の文章として、道光帝の死後に帝の偉業を称えた文章もある¹⁴。『宣宗実録』の最後の記事として掲載されているこの文章の一節には、「東三省根本之地。尤勤訓諭。返樸還淳。」とあるが、ここには地域としての「東三省」に対する言及がみられ、かつ、その「東三省」の語には道光帝の理念的認識が表現されている。つまり、アヘン戦争の時期に至っても、清朝は19世紀初頭の時期と変わらず、依然としてマンチュリアを特殊地域として認識し続けており、そして、そうした認識を「東三省」の語によって表現していたのではなかろうか。

ただ、道光年間の記事の中の「東三省」の語の用法には、嘉慶年間と比べて何らの違いもなかったというわけでもなく、かつ、18世紀の記事との間にもいくらかの違いをみて取ることができる。ここではその違いを示唆するような記事・主題として、道光年間における「東三省官兵の俸餉問題」という財政問題をさしあたり指摘しておきたい。

本章ですでに何度か紹介してきたように、この「東三省官兵の俸餉問題」を記した各記事の中には、清朝が「東三省」の俸餉問題の解決策として、マンチュリアの各地（盛京(奉天)・吉林・黒龍江）と中国内地の各省との間での俸餉支給用財源の融通策(協餉)を模索し始めていたことが記されているが、そこでは、その盛京・吉林・黒龍江の三地域のそれぞれが「省」として明確に記されている。このことから推測すれば、その「東三省官兵の俸餉問題」を始めとする財政問題に関しては、清朝とその官僚は、マンチュリアの行政機構を、その俸餉支給用財源をやりとりする一つの行政主体とみなしつつ、中国内地各省の行政機構と同列のものとして位置づけていたという点を指摘し得る。すなわち、遅くともこの道光年間にはすでに、財政問題という主題・文脈においては、マンチュリアは特殊なイメージを含んだ理念的な地域としてだけではなく、中国内地の各省とほぼ同等・同質な行政主体の纏まりとしても清朝に徐々に認識されるようになっていたということになる。以上のことから、道光年間以降における「東三省」の語の用法の変化、並びに清朝の対マンチュリア認識における変化の背景・要因の一つとして、この「東三省官兵の俸餉問題」の端緒・顕在化を挙げることができるのではなかろうか¹⁵。

では、本章の最後に、前節と本節におけるそれぞれの議論を総合しつつ、嘉慶年間から道光年間にかけての時期、すなわち、19世紀前半における清朝の対マンチュリア認識の特徴について簡単に纏めておこう。

清朝は19世紀前半の時期においても、18世紀から変わることなく、「東三省」の語として表現されるマンチュリアとその人的集団の優越性・特殊性を依然として強く認識し続けていたものと考えられる。ただ、その一方では、道光年間になると、マンチュリアに新たに発生してきた「東三省官兵の俸餉問題」のような財政問題への対応をも余儀なくされ、清朝は中国内地各省とのやりとりを前提とした協餉策を本格的に模索することになったが、そうした過程を経て、「東三省」を中国内地各省と類似する行政主体としても徐々に認識するようになっていったようである。すなわち、19世紀前半の清朝は、18世紀と同様にマンチュリアとその人的集団の持つ優越性・特殊性への認識を基本的には維持しながらも、その一方で、マンチュリアと中国内地各省との間の類似性や同質性をも徐々に認識するようになっていったのではなかろうか。

第2章 「盛京(奉天)吉林黒龍江」の語句の用例・用法

——「省」と「處」の語の用法の違いにも触れながら

前章では、「東三省」の語の用例・用法を紹介・分析してきたが、この「東三省」の語は盛京・吉林・黒龍江の三將軍の管轄区域を示す語としても多用されている。ただ、この三將軍の管轄区域を「東三省」の語で纏めるのではなく、「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」のそれぞれを並記する場合もあった。19世紀前半の『清実録』にはそうした用法を持つ記事が散見されている。

また、前章では、「東三省」の語中の「省」の語に付された意味の中に、中国内地各省との同等性や同質性という含意がどこまで存在しているのか、それが時期の違いによっていかなる変化を帯びているのか、といった課題のあることも指摘しておいた。

そこで、本章では、前章のような「東三省」の語で纏められて記載されている記事ではなく、「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」の3つの語が並記されている記事を探りあげ、その並記の出現する文脈や内容を分析し、また、その3つを「省」として纏めているのか、それとも「處」の語を用いて纏めているのかという点にも併せて注目しながら、19世紀前半の清朝がマンチュリアという地域に対していかなる認識を持っていたかについて、前章とは些か異なる視点からその検討を試みたいと思う¹⁶。

(1) 嘉慶年間の用例

まずは、嘉慶年間の記事を挙げよう。合計13件の記事が確認できる。

このうち、「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語の並記を行ったあとに「省」の語も「處」の語も付されていない記事としては、以下の6件を確認することができる。

■001. 罷盛京吉林黒龍江兵、演習雲梯。先是以各直省省城。駐防滿兵無事。令以雲梯。添入技藝演習。兵部咨行。及盛京等三省。黒龍江將軍永琨、以黒龍江地方不便為言。上以三省遵滿洲舊習。武藝素強。地方形勢。又與各省城不同。故併罷之。【『仁宗実録』卷12 嘉慶元年12月戊子(17日)】

■002. ([壬辰]調盛京兵二千名。吉林、黒龍江兵、各一千名。赴湖北剿賊。)免調派盛京吉林黒龍江兵丁經過沿途州縣本年額賦。直隸自山海關、至磁州、十分之三。河南、至湖北、十分之五。【『仁宗実録』卷50 嘉慶4年8月甲午(8日)】

■003. 又諭、盛京官兵。及吉林黒龍江馬隊官兵。從征日久。艱苦備嘗。其中傷病之人。自應量加體卹。且大功即日告竣。額勒登保請先行徹令回京。所見甚是。但功成凱旋。非比征調之時。行走必須迅速。若分起開日起程。沿途車馬。供支恐有未周。或以二百名。或以二百五十名為一起。隔三四日派員管帶。分起行走。著額勒登保將每起若干人。派侍衛章京何人帶領。何日起程。逐一分晰具奏。一面飛咨沿途地方官、豫備車馬等項。妥為照料。【『仁宗実録』卷86 嘉慶6年8月乙丑(21日)】

■004. 又諭、昨兵部將軍營徹回寧古塔防禦色克金保帶領引見。色克金保所奏履歷。竟非清語。因交軍機大臣詢問。據稱伊平日屯居。該處漢人居多。故未諳清語。色克金保以東三省人。不能清語。本應治罪。姑念伊在軍營甚屬奮勉。著加恩寬免。即令回任。色克金保身為防禦。有管教兵丁之責。且年歲尚輕。著交秀林善為教導。務令熟習清語。至東三省係我朝根本之地。清語即如鄉談。原應不學而能。乃竟有不曉清語之人。想東三省似此者尚復不少。相沿成習。不惟不曉清語。必致技藝廢弛。所關綦重。不可不加整飭。著盛京吉林黒龍江將軍等、各將所管官弁、嚴行教訓。務令馬步射精銳。清語嫻熟。毋忘本業。【『仁宗実録』卷113 嘉慶8年5月壬寅(9日) [前章、上掲■15の記事と同じ]

■005. 又諭、據觀明覆奏、黒龍江地方情形、兵丁不宜添演長槍請旨一摺。所奏甚是。東三省兵丁、專以打牲為業。騎射鳥鎗等技。本自精熟。虎槍素練習。若令與綠營兵丁一體兼學長槍。轉致誤其馬上技藝。所有

盛京吉林黒龍江兵丁、均著毋庸兼習長槍。仍著照舊演習弓箭鳥鎗、及一切馬上技藝。務使益臻精銳。【『仁宗実録』巻169 嘉慶11年10月壬寅(29日)】[前章、上掲■30.の記事と同じ]

■006. 論内閣、每年由盛京、吉林、黒龍江、官員兵丁内。揀派善獵人員三十名隨扈進哨。射獵牲畜。原恐伊等技藝漸至生疏。是以令其隨圍演習。惟黒龍江之索倫、達呼爾等、技藝本能嫺熟。且在該處亦時常習獵。若每次派善獵人員照例前來。路途遙遠。恐伊等未免糜費。著交該將軍特依順保、嗣後將隨圍之黒龍江善射人員三十名。裁減一半。其餘習圍人等亦應酌減。以節兵力。至盛京吉林應來隨圍人等、著照舊揀派。【『仁宗実録』巻334 嘉慶22年9月丙午(5日)】

この6件の記事ではいずれも、「盛京吉林黒龍江」の語句のあとに、「官兵」「官員」「兵丁」「將軍」など、人的集団に関する語を繋げており、人的集団の枠組みを表現する語とみなせるので、これらの記事における用法は、前章で紹介した「東三省官兵」などの語の用法とほぼ同じものと考えられる。なお、これらの記事では「奉天」と表現しておらず、いずれも「盛京」と表現している¹⁷⁾。また、この6件の記事は嘉慶年間を通じてみられており、時期的に偏りがあるようでもない。

次に、「盛京吉林黒龍江」の語句のあとに「省」の語、あるいは「處」の語を付している記事を確認していこう。合計で7件の記事が確認できる。そのうち、「盛京」「吉林」「黒龍江」の纏まりを「省」の語で表現している記事は以下の2件である。

■007. 又諭、昨降旨令軍機大臣等、會議盛京吉林黒龍江三省兵丁拴養馬匹章程。朕思大凌河孳生馬匹。自國初以來。定制已久。富俊請將大凌河馬羣裁撤。分撥各處。其事斷不可行。此條即行飭駁。著毋庸議。其上駟院堂官。亦無庸會議。【『仁宗実録』巻354 嘉慶24年2月己丑(27日)】

■008. 丙申。論内閣、盛京、吉林、黒龍江、三省。自國初以來。本無官拴馬匹。上年朕親詣陪都。亦未見該處有缺馬情形。迨回京後。經誠安奏稱伊奉使吉林。與賽沖阿、松寧、會商東三省馬匹短少。欲懇請添設官馬以裕差操。賽沖阿等未及具摺。伊特於召對時面陳。其時適有年班到京之將軍德寧阿、祿成等、或生長其地。或莅官其省。經朕詳加詢問。並向籍隸東三省之侍衛等、逐加體訪。或以為應行加設。或以為無庸增添。其說不一。隨降旨令賽沖阿、富俊、松寧、三人酌議。嗣據賽沖阿奏請盛京各城添設馬一千匹。松寧奏請黒龍江添設馬二千匹。富俊奏稱吉林兵丁、皆有孳生馬匹打牲為業。並無不能騎馬之人。朕以三省所議兩歧。令富俊再議。富俊始有裁撤大凌河馬羣、分撥各處之議。察富俊之意。亦明知大凌河馬羣為不可裁。強為此說。其意仍主於無庸增設。因交軍機大臣、與英和、松筠、和寧、會同兵部妥議具奏。茲據托津等十二人會議。奏稱東三省添立官馬惟有添至數萬匹。庶可布置周妥。而經費有常。斷難輕議。若但抽添三四千匹。兵多馬少。實屬無益。不若仍循其舊。朕因明亮、和寧、俱曾任東三省將軍。且歷練營務。復加面詢。伊二人俱以為添馬事屬難行。即戴聯奎、曹師曾、亦面奏不如仍舊。惟松筠單銜奏請盛京添棚馬一千匹。吉林添棚馬六百匹。黒龍江添棚馬四百匹。較賽沖阿等請添馬數更少。亦於操練何裨。朕辦理庶政。執兩用中。善鈞從衆。所有東三省官拴馬匹一事。竟可無庸辦理。仍循舊章。以安本俗。將此明白宣諭賽沖阿富俊松寧知之。【『仁宗実録』巻355 嘉慶24年3月丙申(4日)】[前章、上掲■44.の記事に同じ]

この■007.と■008.の2件の記事では、「盛京吉林黒龍江」の語句のあとすぐに「三省」の語が付されている。前者では、「三省」の語のあとに「兵丁」の語が続けられており、後者では、その語句が「三省」として纏められたあとに、しばらくして「東三省」の語が現れ、そのあとすぐに「馬匹」「侍衛」「將軍」の語が続けられている。したがって、これらの2件の記事も、前の「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語の並記のあとに「省」の語も「處」の語も付されていない■001.から■006.までの各記事と同様、人的集団の枠組みを表現する文脈の中で用いられているものとみなせよう。

以上、「盛京」「吉林」「黒龍江」の並記を行ったあとに「省」の語も「處」の語も付されていない6件

の記事と、「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語を「省」の語で纏めている2件の記事を合わせた上掲8件の記事における用法はいずれも、嘉慶年間の「東三省」の語と同様、主に人的集団の枠組みを意味するものとして位置づけておくことが可能であろう。因みに、「省」の語で纏めている■007.と■008.の2件の記事はどちらも、嘉慶年間最末期のものである。

最後に、「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」の3つの語を「處」の語で纏めている記事としては、以下の5件の記事がある。

■009. 甲寅。諭内閣、工部奏詳校例案酌議請旨一摺。並開列清單進呈。朕閱單開各款。內有旗員葬銀碑銀一款。外省均由布政司給發。報部覈銷。惟東三省所屬旗員。例應出具文領。赴部領回給發。歷來遵辦已久。而吉林一處。自嘉慶七年起。該將軍於旗員應得葬銀碑銀。准禮部原題。即由本處給發。報部請銷。經該部覈與應給銀數相符。未經議駁。即予准銷。所辦均屬非是。各部相沿例案。總宜遵循舊章。不得妄自更改。吉林旗員葬銀碑銀。該將軍於接到禮部原題時。自應查照向例辦理。如以赴部領給。較多跋涉。即應據實奏明。請由本處動支。候旨遵行。乃輒自行給發。跡近專擅。秀林著交部議處。工部於該將軍報銷時。既覈與成例不符。自當駁令赴部請領。亦不應率准支銷。所有原議准銷各案之工部堂司官、著查明交部參議。至此項銀兩。各省既由布政司給發。何以東三省所屬之員。獨令遠涉京師、赴部具領。不特稽延時日。且往來未免需費。亦非所以示體卹。嗣後盛京、吉林、黒龍江、各處旗員、應得葬銀碑銀。均著改由本處給發。報部覈銷。以歸畫一。餘著照所請行。【『仁宗實錄』卷150 嘉慶10年9月甲寅(5日)】[註4. ■24.の史料に同じ]
この■009.の記事では、「盛京吉林黒龍江各處」とあるが、そのあとに「旗員」の語が付されている。因みに、その前には「東三省所屬旗員(之員)」と記されているように、この記事の用法も■001.から■008.までの8件の記事と同様、人的集団を意味するものといえよう。因みに、この記事でも「奉天」ではなく、「盛京」の語が用いられている。

■010. 定本年秋審情實人犯、單恩歸入緩決、過二次再行減等例。又諭、本日刑部將奉天吉林黒龍江等處應行減等死罪官常各犯、摘敘案由、按其已入秋審、未入秋審、分別准減不准減。繕單具奏。朕一一詳加披閱。其官犯佟瓚一名、先在佐領任內。因派令前赴高麗、帶燒毀賊犯偷砍木植窩棚。該犯懶惰。未經燒盡。革職作為兵丁。仍赴卡倫効力。該犯託病遷延。屢經嚴催不赴。盛京官兵等、近來習氣卑靡。貪賄營私。以致釀成高麗謁巨案。該犯於奉派查辦時。疊次怠玩推諉。不知儆懼。情節殊為可惡。又伊靈阿一名、身為職官。因奉差進京。尚途逗遛。宿娼飲酒。賭博聽曲。實屬有玷官方。均著不准減等。其已入秋審常犯罪內、自張恭發至僧興德七犯、均著不准減等。烏雲珠、已入情實四次。王德、亦已二次。均著照議減等。自張朝綱至姜定安二十四犯、均係本年定讞。甫入秋審情實。此內惟王廷儉、姜定安二起。係用鋤刀給人治病。致傷斃命。情尚可原。其餘各犯情罪。均當予以勾決。特適遇今年朕舉行展謁大典。解澤普覃。該犯等尚非罪在十惡。幸邀寬赦。若遞予減等。與久禁囹圄者太無區別。不足以昭平允。該犯等仍著監禁。歸入秋審緩決案內。俟過二次後、再行減等。嗣後遇有單恩減等時。所有本年秋審情實應行酌減人犯。該部均照此辦理。著為令。其自緩決十六次之項榮、至緩決一次之李大成、共二百九十一犯、均著准其減等。至因瘋斃命各犯內劉小見一犯、係砍傷總麻伯斃命。服制攸關。不准援減。張來成、李播、陳花、三犯、均著俟瘋病痊愈、結報到部日。准予減等。其未入秋審常犯罪內。高起發、謝均、寵三兒、三犯、不准減等。仍入明年秋審情實。自陳太至趙明共七十犯、著刑部堂官詳細查覈本案情節。酌定應入情實、應入緩決、摘敘案由。分別開單具奏。候朕再行定奪。餘著照所議行。【『仁宗實錄』卷151 嘉慶10年10月癸卯(24日)】

■010.の記事では「奉天吉林黒龍江等處」と記されているが、その語句は「各犯」の語に掛かっているものであり、その点で、この記事も人的集団を表現したものと言えようが、ただ、前の記事と異なるのは、その人的集団が旗人以外の人々をも含んでいるという点である。なお、この記事では、上掲の各記事とは違い、「盛京」ではなく、「奉天」の語を用いている。

■011. 又諭、此次奉天吉林黑龍江等處、犯事僉發各省已到配軍流人犯。除傳習邪教、及有關十惡並歷次赦款內、不准援免之情罪較重者。俱毋庸查辦。其情罪較輕之犯。著刑部覈明。准其與未到配各犯一體寬免。【『仁宗實錄』卷351 嘉慶23年12月甲戌(11日)】

この記事も■010.の記事と同様の用例である。「奉天吉林黑龍江等處」の語句が「人犯」の語に掛かっているものである。なお、ここでも「盛京」ではなく、「奉天」の語を用いている。■010.と■011.の2件の記事からだけの推測に過ぎないが、刑罰・法制に関わる問題を取り扱う主題・文脈では、「盛京」ではなく「奉天」の語が主として用いられている点が印象的である。嘉慶年間の時点では、刑罰・法制に関わる文脈の場合に「奉天」の語が用いられる場合があったとさしあたり考えておこう。

■012. 又諭、毎年進哨以前。盛京、吉林、黑龍江等處將軍呈進鷹鶴。此雖舊制。惟朕行圍撤放鷹鶴時較少。若賞給隨扈王大臣。伊等亦無撤放之處。嗣後盛京、吉林、黑龍江、著各按原進數目減半呈進。【『仁宗實錄』卷333 嘉慶22年8月丁丑(6日)】

■013. 諭內閣、朕此次恭謁祖陵。駐蹕盛京。所有盛京、吉林、黑龍江等處、應行引見、及補行引見之大計軍政卓異文武官員。著交行在吏兵二部。就近在盛京帶領引見。【『仁宗實錄』卷344 嘉慶23年7月己亥(3日)】

この■012.と■013.の記事は、「盛京吉林黑龍江」の語句のあとに「等處」の語が続くものの、そのあとに「將軍」あるいは「官員」の語が続けられている用例である。したがって、これらの記事も上掲の各記事と同様、ほぼ人的集団を示す用例としてさしあたり位置づけておくことができよう。

以上、嘉慶年間における「盛京(奉天)吉林黑龍江」の語句が用いられている記事をそれぞれ確認してきた。ここから確認できるのは、「東三省」の語と同様、「盛京(奉天)吉林黑龍江」の語句も、明確に地理的・空間的な纏まりを持った語として用いられていたというよりはむしろ、その人的集団としての纏まりを表現するものとして多用されていたという点であり、また、「省」の語を用いてそれを纏めた語句であっても、「處」の語を用いてそれを纏めた語句であっても、基本的にはその両者に意味上の大きな違いを認めることはできないという点である。

すなわち、嘉慶年間においても、清朝は「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」のそれぞれを、地理的・空間的な纏まりというよりはむしろ、三將軍を中心として統轄されている「旗員」や「官兵」などの人的集団の纏まりとして基本的には認識していたということになる。

(2) 道光年間の用例

それでは引き続き、道光年間の記事を紹介・分析していこう。合計で11件が確認できる。

まず、そのうち、「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語の並記のあとに「省」の語も「處」の語も付されていない記事としては、以下の4件を確認することができる。

■014. 又諭、富桑阿奏參疏縱解部人犯。請將管解弁兵交部治罪。並自請察議一摺。此案埽單保、係擬實發邊遠充軍解部之犯。經該副都統委防禦喜成、兵丁郭勒明阿等、押解刑部。因冒雨渡河。山水漲發。被水衝倒。該犯潛入莊稼地內。找尋無蹤。情節甚屬支離。該犯係黒龍江人。狀貌語言。無難辨認。或潛回黒龍江。或沿途逗留。均未可定。著直隸總督盛京吉林黒龍江各將軍。飭屬一體嚴拏務獲。毋得視為尋常緝犯具文。致任遠颺漏網。防禦喜成、著革職。留於地方協緝。兵丁訥木錦、因患病未隨同押解。免其責革。郭勒明阿、著照例責革。亦留該處隨同協緝。俱毋庸解部。俟拏獲該犯時、訊明實情。再行分別辦理。協領六十一、派差不慎。著交部議處。富桑阿著交部察議。【『宣宗實錄』卷56 道光3年8月戊戌(2日)】

■015. 宗人府議奏、發遣宗室章程。嗣後如遇發往盛京吉林黑龍江之宗室。交該將軍酌量給與房間。或歸入宗室營居住。到配時應食錢糧半分。即照例支給。毋庸備文請示。從之。【『宣宗實錄』卷 304 道光 17 年 12 月庚戌(7 日)】

■016. 鴻臚寺卿黃爵滋奏、請嚴塞漏卮以培國本。近年銀價遞增。每銀一兩。易制錢一千六百有奇。非耗銀於內地。實漏銀於外夷。蓋自鴉片煙土流入中國。粵省奸商。勾通巡海兵弁。運銀出洋。運煙入口。查道光三年以前。每歲漏銀數百萬兩。三年至十一年。歲漏銀一千七八百萬兩。十一年至十四年。歲漏銀二千餘萬兩。十四年至今。漸漏至三千萬兩。此外福建江浙山東天津各海口。合之亦數千萬兩。日甚一日。年復一年。誠不知伊於胡底。耗銀之多。由於販煙之盛。販煙之盛。由於食煙之衆。今如實力查禁。必先加重罪名。開紅毛國法。有食鴉片煙者。必集衆環視。繫其人竿上。以礮擊之入海。外夷如是。何況中國。應請嗣後內地有吸食鴉片者。限一年內。務各斷絕煙癮。如一年後仍然吸食。是即不奉法之亂民。俱罪以死論。並嚴飭各督撫轉飭各府州縣。清查保甲。豫先曉諭居民。定於一年後。取具五家鄰右互結。如有犯者。准令舉發。給與優獎。儻有容隱。一經查出。本犯照新例處死。互結之人。照例治罪。得旨、著盛京吉林黑龍江將軍、直省各督撫、各抒所見。妥議章程。迅速具奏。【『宣宗實錄』卷 309 道光 18 年閏 4 月辛巳(10 日)】

■017. 甲辰。諭內閣、前據黃爵滋奏、請嚴塞漏卮。以培國本。當降旨交盛京、吉林、黑龍江將軍、直省各督撫。各抒所見。妥議章程具奏。茲據各該省陸續奏到。著大學士軍機大臣會同該部議奏。穆彰阿係大學士軍機大臣。現雖穿孝。著一併會議。【『宣宗實錄』卷 314 道光 18 年 9 月甲辰(6 日)】

■015. の記事を除き、「盛京吉林黑龍江」の語句はいずれも、盛京・吉林・黒龍江の三將軍それ自体を指すものとして用いられている。ただ、その■015. の記事だけは、盛京・吉林・黒龍江の三地域に清朝が送致（「發往」）させた宗室のことを述べたものであり、この記事の中の「盛京吉林黑龍江」の語句には、送致対象地域としての地理的・空間的な意味も込められているものと考えてよからう。

■018. 免應付本處官兵及供應兵差過境兼辦糧運軍需之伊犁、烏嚕木齊、哈密、吐魯番、巴里坤、各城甘肅各州縣上年本年額賦。並協濟軍需及應付兵差之甘肅、陝西、各州縣十分之六。盛京、吉林、黒龍江、順天、直隸、河南、四川、兵行過境各州縣十分之四。已徵者。均准抵下年額賦。【『宣宗實錄』卷 122 道光 7 年 7 月戊辰(25 日)】

また、この■018. の記事では、「盛京」「吉林」「黒龍江」の 3 つの語が直隸や河南などの中国内地各省と並記されているが、この記事の中の用法も地理的・空間的枠組みを意味するものとしてみなすことが可能であろう。

では次に、「盛京吉林黑龍江」の語句のあとに「省」の語、あるいは「處」の語が付されている記事を確認していこう。合計で 6 件の記事が確認できる。ただ、筆者には些か意外に思われたが、そのうち、「盛京」「吉林」「黒龍江」の 3 つの語を「省」の語で纏めている記事は 1 件しかなく、その他の 5 件は全て「處」の語で纏めている記事となっている。

■019. 諭內閣、朕昨日經過杏山迤東之石門子地方。閱看馬廠內排列大凌河驕馴馬三十四羣。共一萬二千九百五十餘匹。均極臚壯整齊。從此逐歲孳生。日益蕃庶。遇有差調。何患不敷。因思嘉慶年間。富俊曾經奏請裁撤大凌河牧廠馬匹。分撥盛京吉林黑龍江三省官兵控養。皇考仁宗睿皇帝特降諭旨飭駁。以其事斷不可行。仰見聖慮周詳。至深且遠。馬政攸關緊要。大凌河牧場寬廣。水草茂盛。實足為蕃息之資。若輕議裁撥。則散之甚易。聚之甚難。必致馬匹缺額。不能仍復舊規。儻再有率為此請者。即係莠言亂政。定當執法嚴懲。現在該處馬羣充牣。已有成效。嗣後著該副都統留心稽查。認真經理。嚴飭各莊頭。每歲於馬匹歸槽時。加意餵養。出青時妥為牧放。務令孳息蕃昌。多多益善。俾一律肥壯可用。斷不可稍形懈弛。以致有名無實。若日久視為具文。馬羣內有疲瘦殘傷。不堪調用者。一經查出。惟該副都統是問。【『宣宗實錄』卷 160 道

光9年9月丙申(5日)】

この■019の記事は、「省」の語によって「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語を纏めている唯一の記事であるが、「三省」の語のあとすぐに「官兵」の語を続けているこの用法は「東三省官兵」などの語の用法と同様のものと思われる。すなわち、「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語を「省」の語によって纏めている記事であっても、そこに地理的・空間的な意味が常に含まれているわけではないことがこの記事からも確認できよう。

最後に、「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」の3つの語を「處」の語で纏めている5件の記事を検討しよう。

■020. 又諭、此次巡幸盛京。恩膏疊沛。所有緣事發往盛京吉林黒龍江三處官犯。亦應覈其情節。量施法外之仁。著盛京吉林黒龍江各將軍。查明各官犯原案。開列清單。具奏請旨。【『宣宗實錄』卷160 道光9年9月乙卯(24日)】

■021. 又諭、朕此次巡幸盛京。諭令奕劻將緣事發往盛京吉林黒龍江三處之宗室覺羅等原犯案由。查明具奏。據奕劻開單呈覽。朕詳加披閱。萬順因懇伊族兄武中阿讓地未允。具呈叩閭。發往盛京。旋因思母。乘間脫逃。被獲仍發原配。德克金泰、因見喀勒明阿逞兇強姦民婦。並不阻止。移駐吉林。嚴加管束。覈其情節。均尚非不可原有。萬順著加恩釋放回京。德克金泰著加恩釋回原駐盛京地方。伊等家屬。並准其一併帶回。其餘各犯。情罪較重。俱不准其釋回。【『宣宗實錄』卷160 道光9年9月乙卯(24日)】

上掲2件の記事にはいずれも、流刑にて送致(「發往」)を命じたその流刑先の地域として盛京・吉林・黒龍江の「三處」があるということが述べられており、続く■022.と■023.の2件の記事でも、

■022. 御崇政殿。扈從王公大臣官員蒙古王貝勒貝子公額駙台吉盛京文武官員朝鮮國使臣等、行慶賀禮。禮成。頒詔天下。詔曰。朕惟典紀巡方。備著隆儀之懋舉。禮崇報本。尤思基緒之丕承。故動展觀於珠邱。恪修禋祀。更布精誠於玉瓊。敬迓蕃釐。緬夫遼海陳區。陪京舊蹟。弓劍肇開夫駿業。車書式廓夫鴻圖。在昔虎踞龍蟠。實鍾瑞氣。迄今瓜綿椒衍。永迪前光。溯夫聖祖三巡。高宗四謁。皇考御極以後。再詣橋山。恭申景慕。朕寅承大統。篤念貽謀。仰締造之宏規。懷顯承於盛烈。幸際時調玉燭。歲奏金穰。況乎巨愆生掄。膚功告蒞。感昊蒼之甄貺。慶寰海之鏡清。皆由世德作求。重熙累洽。茲者欽承懿命。恭侍安輿。虔舉馨香。聿追孝享。於道光九年秋。祇謁永陵。福陵。昭陵。鑾駕升歆。誕膺多祐。謹循成憲。爰莅留都。臚茂典以遵行。昭上儀之景饗。用施闡澤。特沛恩綸。所有合行事宜。條例於左。一、隨從王等、紀錄三次。大臣官員。及奉天文武大臣官員。三陵守衛官員。俱加一級。一、隨從兵丁。及內務府執事人等。俱賞一月錢糧。所賞錢糧。俱在盛京給發。一、奉天及山海關文武大臣官員兵丁。三陵守衛官兵。俱賞資。一、奉天居住之宗室覺羅。及國戚子孫。並移駐宗室。俱賞資。一、奉天府屬應徵道光十年分地丁銀兩。全行寬免。一、奉天旗民男婦。七十至九十以上者。分別賞資。一、盛京試職官員。俱准實授。一、奉天吉林黒龍江等處。除十惡死罪不赦外。其餘死罪俱減等。軍流以下寬釋。一、奉天內務府莊頭。所有道光八年以前積欠。俱寬免。於戲。告武成於九廟。繼序毋忘。彰孝治於八埏。承庥罔替。萱閣集慶。允膺祉福之增。葭屋臚歡。共抱尊親之戴。布告天下。咸使聞知。【『宣宗實錄』卷160 道光9年9月丙辰(25日)】

■023. 又諭、特登額奏、奉天吉林黒龍江等處。犯事簽發各省。已經到配軍流人犯。可否與未到配各犯。一體查辦一摺。著准其一體查辦具奏。【『宣宗實錄』卷160 道光9年9月戊午(27日)】

となっている。■020.から■023.までの4件の記事はいずれも刑罰や法制に関する内容を有するものであり、また、ここでの「盛京(奉天)吉林黒龍江」の語句はどれも地域的な枠組みとして用いられている。因みに、前二者の記事で「盛京」の語が用いられている一方、後二者の■022.と■023.の記事では「盛京」ではなく、「奉天」の語が用いられている。

■024. 辛亥。諭內閣、孟魁奏、委員護解貂皮一摺。吉林所屬三姓進貢貂皮二箱。委員佐領額勒金、到關因病、不能前進。經該副都統揀派佐領豐伸布、帶同原解兵丁護送。所辦甚是。此項貢物。沿途例有護解兵丁。總聽原解官親率呼應。儘派出解官。或有患病等故。無人彈壓。嗣後盛京吉林黑龍江等處。派員護解貢物。除揀派解官一員外。著添派佐領以下官一員。責令小心護解。庶沿途足資彈壓。以免疏虞。【『宣宗實錄』卷261 道光14年12月辛亥(21日)】

そして、最後のこの■024.の記事の中の「盛京吉林黑龍江」の語句も、地域的な枠組みを示すものとして用いられていると考えられよう。

以上の分析からは、道光年間の各記事におけるその用法の特徴として、將軍個人あるいはその配下の人的集団を意味する用法だけでなく、地理的・空間的枠組みを意味する用法もしばしばみられるという点を指摘し得る。この点は嘉慶年間の用例とはいささか異なっている。また、その各記事のうち、「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」の3つの語を並記し、それらを「三處」あるいは「等處」として纏めている用法のほうに、その3つの語に地理的・空間的な意味が付されている場合が多いようである。逆に言えば、地理的・空間的な意味づけを込めつつ「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」の3つの語を並記する場合には、その3つを「三省」の語で纏めるのではなく、むしろ「等處」「各處」あるいは「三處」の語で纏める用法が多かったということになる。一方、これとは逆に、「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語を「省」の語で纏めている記事は1件に過ぎず、かつ、その記事の中の「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語は主として人的集団の纏まりを示すものとして用いられている。したがって、道光年間の清朝は、「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」のそれぞれを「省」として認識していたというよりはむしろ、「處」という枠組みで認識する傾向がなお基本的には強かったものと考えられよう¹⁸。

おわりに

本稿では、19世紀前半の嘉慶・道光年間における、「東三省」の語とそれに類似する用法としての「盛京(奉天)吉林黒龍江」の語句を含んだ『清実録』の中の各記事を逐一紹介・分析してきた。以下、多分に筆者の推論を含むものの、本稿での分析から導かれるそれらの語の用例・用法の特徴や、そこに表現されている清朝のマンチュリアに対する認識の特徴について纏めておこうと思う。

まず指摘し得る第1の特徴は、19世紀前半における「東三省」の語が基本的には、18世紀とほぼ同様に、マンチュリアという地域の地理的・空間的枠組みを示す語としてではなくむしろ、マンチュリアの人的集団の優越性・特殊性などに対する清朝の理念・理想像を示す語として多用されていたという点である。このことは、「盛京」「吉林」「黒龍江」の3つの語を「省」の語で纏めている用法が基本的に人的集団の纏まりを示すものであったという本稿第2章での検討内容とも概ね合致する。因みに、19世紀前半のマンチュリアには、18世紀とは些か異なる、清朝にとって好都合ではない現実の変化——例えば漢人移民の増加など——が生じてきており、清朝もその現実を確かに認識していたであろう。ただ、清朝はそれでもなお「東三省」の語を、そのマンチュリアにおける現実をそのままに表現する語としてではなく、マンチュリアの人的集団の「あるべき理想像」を強調する文脈の中で専ら多用し続けていた。つまり、「東三省」の語はマンチュリアの現実を示すものではなく、清朝自らの理念的認識を多分に含むものであったことになる。すなわち、清朝は、マンチュリアの現実を確かに認識する一方で、その人的集団に対する自らの理念・理想像を逆に強調し、その自らの理念的な認識を「東三省」の語に強く込め

たと言えるのではなかろうか。

それでは、19 世紀前半の時期において、「東三省」の語が地理的・空間的枠組みを示すものとして用いられることはほとんどなかったのだろうか。また、清朝はマンチュリアという地域を如何に認識していたのだろうか。さらに、清朝はマンチュリアとその人的集団をほぼ理念的にのみ認識していただけだったのだろうか。このような疑問に対する解答がその第 2 の特徴ということになる。結論からいえば、19 世紀前半の時期には、清朝からみた理想境としてのマンチュリアという地域認識は清朝自身も持っていたものの（例えば、「根本重地としての東三省」という語句の用法に象徴されるような認識がそれにあたると思われるが）、清朝が一般的にマンチュリアに含まれる各地域を認識する場合には、概ね盛京・吉林・黒龍江の三將軍の管轄地域それぞれを基本的な単位として認識するに止まっていたのであって、19 世紀前半の時期の清朝のマンチュリアに対する認識はあくまでその 3 つを纏めたものに過ぎなかったと考えられる。道光年間の『清実録』の記事の中で、マンチュリアという地域の基本的な枠組みとして「東三省」の語ではなく、むしろ、「盛京(奉天)」「吉林」「黒龍江」の 3 つの語を並記しつつ、それらを「等處」「三處」などの語で纏めている用法が相対的に多いのは、そのような清朝の認識を象徴するものであって、19 世紀前半の時期に至っても、盛京・吉林・黒龍江という三將軍のそれぞれの管轄地域以上の大きな地理的・空間的枠組み——例えば「マンチュリア」のような——に基づく地域認識は、理念的なものを除けば、清朝にはまだ依然として希薄だったと言えよう。

もちろん、この時期の「東三省」の語は、その多くがマンチュリアやその人的集団の優越性・特殊性に対する清朝の理念的な認識を帯びていたものの、19 世紀前半の時期になると、「東三省」の語の中の「省」の語の含意が中国内地における「省」の語の含意と類似する用法もいくつか確認されるようになってきている。指摘し得る第 3 の特徴はここにある。本稿ですでに確認してきたように、道光年間以降の記事のうちの、その内容が財政や刑罰・法制などに関わる記事、例えば「東三省官兵の俸餉問題」に関する各記事の中の「東三省」の語には、その「省」の語の中に中国内地各省の「省」という概念に類似する含意を確かに窺うことができる。このように、19 世紀前半の各記事のうち、財政や刑罰・法制といった中国内地との関わりが強い文脈においては、「東三省」の語とそれが指し示す内容にも確かに、中国内地各省と同様の地理的・空間的な概念を帯びたものが出現しているわけである。このことに鑑みれば、19 世紀前半の時期には、マンチュリアで生じていた現実の変化の中だけでなく、マンチュリアとその人的集団に対する清朝の認識の中にも徐々に「内地化」の傾向が生まれてきており、おぼろげなものではあったにせよ、清朝はマンチュリアとその人的集団を中国内地の各省と類似する存在としても徐々に認識しつつあったものと考えられよう。

ただ、繰り返しになるが、上述のような「東三省」の語の 18 世紀と 19 世紀との間の用法の違いはやはりまだ例外的なものであって、基本的には、19 世紀前半の「東三省」の語の用例・用法は 18 世紀におけるそれと殆ど変わっていなかったと言うべきであろう。また、19 世紀前半の時期に至ると、18 世紀に比べて「東三省」の語自体の用例数が格段に増え、「省」という概念自体はマンチュリアにも確実に浸透しつつあったと思われるが、しかしそれでも、19 世紀前半の時期には、「東三省」の中の「省」の語の含意と中国内地各省の「省」の語の含意との間の同等性や同質性は基本的に依然として希薄であったように思われる。よって、これまでしばしば試みられてきたような、『清実録』の中の「東三省」の語の用例の出現をその直接的な根拠とみなしつつ、清代マンチュリアにおける歴史的変容を「中国化」「内地化」「漢化」の進展過程として説明しようとするその方法は、18 世紀の歴史を対象とする場合だけで

なく、「中国化」「内地化」「漢化」のさらなる進展を経験したこの19世紀前半の歴史を対象とする検討を行う場合においてもなお、さしあたりは避けておくべきなのではなかろうか。

本稿は、「はじめに」でも述べたように、検討する時期や検討すべき語などについて省略したものが多く、「東三省」の語とそれに類似する「盛京(奉天)吉林黒龍江」の語句を、嘉慶・道光年間という時期に限定しつつ紹介・分析したに過ぎない。よって、その他の関連語の用例・用法についての検討も併せて試みなければならないだろう。また、マンチュリアに対する清朝の地域認識のありようがいかなるものであったかについても、本稿における検討方法に加え、例えば、清朝による諸政策の施行過程を具体的に分析・検討しつつ、その過程における清朝の認識を個別具体的に検証していくことなど、総合的な検討・検証が不可欠である。さらに、前稿や本稿での基本的な論点でありながら依然としてその解決をみていない論点である、地理的・空間的枠組みとしての「東三省」という概念がいつ頃から明確になり、また、いつ頃からマンチュリアという地域呼称とほぼ類似するようになってくるのか、という論点に対する解答を提示するためには、引き続き19世紀後半以降における「東三省」の語やその他の関連語の用例・用法に対する分析を必要とするはずである。残されたこうしたそれぞれの課題については、稿を改めて詳しくその分析・検討を試みることにしたい。

〔附記〕 本稿は「洋務運動期の清朝による諸改革からみた一九世紀後半のマンチュリアにおける歴史の変動」(課題番号: 25370828; 平成25-27年度科学研究費補助金・基盤研究(C); 研究代表者: 古市大輔)による研究成果の一部である。

註

- ¹ 古市大輔『『清実録』のなかの「東三省」の語とその用例・用法——18世紀清朝の対マンチュリア認識との関わりにも触れながら——』(『金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇』4, 2012年, 1-59頁)。なお、本稿における課題や目的の多くはこの前稿にも記してあるので、是非併読されたい。
- ² 前掲註1の古市2012年論文と同様、『清実録』における用例の確認と本稿でのその史料引用は、台湾華文書局発行の「大清歷朝実録」のなかの『世祖章皇帝(順治)実録』『聖祖仁皇帝(康熙)実録』『世宗憲皇帝(雍正)実録』『高宗純皇帝(乾隆)実録』の記載に基づいている。ただ、検索・確認の便を図るため、必要に応じて、台湾中央研究院ウェブページ内の「漢籍電子文獻瀚典全文検索系統」にある「清実録」の全文データベース(筆者は2004年に閲覧)、並びに凱希メディアサービス「彫龍 中国古籍全文検索叢書シリーズ「清実録(繁体字版)」」を併用した。なお、本稿では基本的に新字を用いるが、史料引用の部分に関しては可能な限り正字(旧字)によって記載してある。また、史料引用中の句読点は台湾華文書局発行の「大清歷朝実録」に拠っているが、その引用史料中に付してある下線部(波線部を含む)や「東三省」やその他の語の太字の指定は、いずれも筆者によるものである。
- ³ 額勒登保(エルデンボー, Eldemboo)は満洲正黄旗人。瓜爾佳氏(Güwalgiya hala), 吉林出身の武人。乾隆年間に各地の反乱鎮圧に従軍, 18世紀末に苗(ミャオ)族の反乱を抑えたのち、嘉慶初年からは白蓮教徒の反乱に携わって戦功を立て、嘉慶帝の信任を得た。嘉慶10(1805)年に死去。『清史稿』(巻344, 列伝131)や『清史列伝』(巻29, 大臣伝次編4)を始めとして彼の伝記は数多い。
- ⁴ 省略した2件の記事は以下の通り。前者は、本稿の本文中でも言及した財政面に関する記事の一つである。
■23. 又諭、據富俊德文奏、盛京銀庫關防郎中一缺、接准部議、由奉天省各部郎中內、揀擬正陪、送部請簡、現在奉省郎中、合例者僅有二員、均不勝掌庫之任、請仍遵舊例辦理等語。盛京銀庫郎中、管理東三省一應錢糧、及庫貯帑項有綜覈出納之責。既據奏稱現在奉省各部郎中難得其人。著照所請、仍照舊例、令在京各部堂官、於所屬郎中內、屆期保送一員。帶領引見。候朕簡派發往更換。但在京各部堂官、每遇保送此項人員時。於平素得力之員。自應留部辦事。而庫務關繫緊要。亦必須於較次司員內慎重選擇。務期得人。方克勝任。儻以年力衰邁、才具平常人員、濫行保送者。經朕察出。必將原保之各該堂官議處。所有現任銀庫郎中寧泰、著

無庸撤回。【『仁宗實錄』卷 133 嘉慶 9 年 8 月戊辰(12 日)】

■24. 甲寅。諭內閣、工部奏詳校例案酌議請旨一摺。並開列清單進呈。朕閱單開各款。內有旗員葬銀碑銀一款。外省均由布政司給發。報部覈銷。惟東三省所屬旗員。例應出具文領、赴部領回給發。歷來遵辦已久。而吉林一處。自嘉慶七年起。該將軍於旗員應得葬銀碑銀。准禮部原題。即由本處給發。報部請銷。經該部覈與應給銀數相符。未經議駁。即予准銷。所辦均屬非是。各部相沿例案。總宜遵循舊章。不得妄自更改。吉林旗員葬銀碑銀。該將軍於接到禮部原題時。自應查照向例辦理。如以赴部領給、較多跋涉。即應據實奏明。請由本處動支。候旨遵行。乃輒自行給發。跡近專擅。秀林著交部議處。工部於該將軍報銷時。既覈與成例不符。自當駁令赴部請領。亦不應率准支銷。所有原議准銷各案之工部堂司官、著查明交部察議。至此項銀兩。各省既由布政司給發。何以東三省所屬之員。獨令遠涉京師、赴部具領。不特稽延時日。且往來未免需費。亦非所以示體卹。嗣後盛京、吉林、黑龍江、各處旗員、應得葬銀碑銀。均著改由本處給發。報部覈銷。以歸畫一。餘著照所請行。【『仁宗實錄』卷 150 嘉慶 10 年 9 月甲寅(5 日)】

⁵ 德楞泰(デレンタイ, Delantai)は蒙古正黃旗人。チャハルの伍彌特(ウミト, Umit)氏。乾隆年間に各地の反乱鎮圧に従軍、苗(ミャオ)族の反乱や白蓮教徒の反乱に携わって戦功を立てた。嘉慶 14(1809)年に死去。代表的な伝記には、『清史稿』卷 344、列伝 131、『清史列伝』卷 29、大臣伝次編 4 などがある。

⁶ 省略した記事は以下の通り。

■42. 癸亥。諭內閣、前據鮑桂星條奏、武英殿刊刻校勘事宜一摺。當經降旨、交軍機大臣議奏。又另片參奏提調劉榮黼等聲名平常。即派武英殿總理事務王大臣、及武英殿總裁會同秉公查奏。及綿恩等奏上時。朕召見常福、據奏伊等在武英殿查勘時、提調劉榮黼、對衆指稱鮑桂星因熙昌校勘修改、恐致遲延、曾言熙總裁所校、不過偏旁點畫、可以將就、並言近日有旨、旗人多靠不住、此時督撫多用漢人等語。當交軍機大臣傳詢鮑桂星、即據認有此語。係本年秋間聞自周兆基、並稱在部與滿員共事。見多有徇私背公者。適是日周兆基自盛京差回。遂著傳詢周兆基。兼令鮑桂星將徇私背公、係何人何事。據實指出。隨據周兆基查覆、伊於召見時並未奉有此旨。亦未與鮑桂星言及。現在已據鮑桂星自認、彷彿記憶是日赴園太早、假寐初醒。周兆基所言、聽聞不真。其鮑桂星所指熙昌囑託武英殿供事、又託將吉林開採煤窯議准、及慶溥託伊工程委員等款。據熙昌登覆。實無請托供事之事。即鮑桂星亦不能指出所託供事姓名。其囑託吉林煤窯一節。據熙昌覆稱、但言吉林請開煤窯。係屬好事。並非託其議准。慶溥登覆、祇認曾在朝房問過鮑桂星所奏何事。鮑桂星答以具奏董率工程。亦未囑託委員。以上各情節。如果鮑桂星存心公正。則周兆基以召對時諭旨、失口向人宣露。鮑桂星應立時參奏。朕必將伊加以褒獎。乃以彷彿無稽之言。輒向劉榮黼轉述。其誣妄之罪。尚何所辭。即慶溥熙昌等、果有囑託情弊。鮑桂星亦應將所託何人何事、原交名條據實參奏。乃因口舌爭競。牽連率指。一經研究。全無證據。豈能以此坐周兆基等之罪。鮑桂星任性乖張。妄言亂政。著交部嚴加議處。慶溥於鮑桂星不同部院。其所奏何事。本不應與聞。乃率行詢問。以致鮑桂星疑有囑託。慶溥著交部察議。周兆基、熙昌、均無庸議。尋議上。得旨、鮑桂星指託慶溥熙昌等囑託公事。一無證據。其咎猶小。至其所述朕輕滿洲重漢人之語。此則妄言亂政之大者。朕統御寰區。滿洲漢人、一視同仁。從無偏愛偏憎於其間。國家設官定制。如東三省及新疆各城、並各省駐防文武大員、皆專用滿洲。此因地制宜之道。有漢人所必不能勝任者。若直省督撫、漢漢間用。因材器使。惟視其人之賢否。何嘗有畸輕畸重之見乎。鮑桂星以私意揣度。為此無稽之言。謬妄已極。著即照部議革職。不准回籍。令其在京閉門思過。仍責成五城御史不時稽察。如私著詩文、有怨望誹謗之詞。即行嚴叅。從重治罪不貸。【『仁宗實錄』卷 300 嘉慶 19 年 12 月癸亥(7 日)】

⁷ その後の嘉慶年間の記事としては、以下の 1 件がある。

■47. 諭內閣、朕本日恭閱皇考高宗純皇帝實錄。內載乾隆二十三年六月軍機大臣會同刑部審擬東華門進班官兵等、於瘋顛僧人拔刀入內、未能攔阻一案。奉旨、護軍參領護軍校護軍等、看守禁門。係其專責。似此瘋疾之人。強行入內。當經以棍擊斃。或以刃砍傷。俱分所當然。乃守禦多人。竟不能一為攔阻。如軍前遇敵。諒不過恇怯奔潰而已。尚能奮勇殺賊乎。此即應如所奏。亦無不可。但積習日久。實未嘗經歷此等事件。且人數衆多。著加恩將擬絞之護軍校努爾瑚訥、長玉、護軍福森保等十六人、俱行寬免、發往拉林阿勒楚喀。此係朕格外恩施。嗣後各宜勤慎當差。嚴為守衛。儼仍前怠玩偷安。必從重治罪。決不寬貸。將此旨著八旗護軍統領書於木牌。凡進班之處。俱行懸掛等因。欽此。又奉諭、協和門進班委護軍校都爾瓦、奪取僧人腰刀。當即擒獲。實屬奮勇可嘉。著加恩補放副護軍參領。賞銀一百兩。幫獲之護軍貴保、賞銀五十兩。其餘人等、各賞銀三十兩。又奉旨於紫禁城四門、各派東三省章京二人看守。仰見我皇考睿慮深遠嚴飭禁衛之至意。朕於十八年辦理逆匪突犯禁門一案。於直班官兵等、分別懲治。並議添東三省官兵。申嚴門禁各事宜。悉與聖諭默相符合。惟十八年逆匪之變。較之瘋僧闖入禁門。更為重大。是日禁門直班官兵。刑部分別擬以重辟。本應即行正法。因人數衆多。改從寬典。當時未免姑息。著交刑部存記。凡此案疏防禁門各犯。無論遇何恩赦。俱不准查辦。即

摺内除某人等不議之語、亦不准敘及。如有在配脫逃者。拏獲奏聞。即行正法。並著前鋒統領護軍統領等、查明現在紫禁城四門章京、護軍校、護軍、每日每門、必須派有東三省官兵數人在內當差。不准缺誤。其乾隆二十三年恭錄諭旨木牌。現在各門仍否一律懸掛。如有遺脫者。著即補繕恭懸。並將十八年朕申嚴門禁各諭旨、另書木牌。凡禁城進班之處。一併懸掛。俾直班官兵等、觸目警心。共嚴宿衛。【『仁宗實錄』卷 373 嘉慶 25 年 7 月戊午(4 日)】

⁸ 省略した記事は以下の通り。

■50. 諭内閣、本年尚在皇考仁宗睿皇帝二十七箇月之內。一切筵宴典禮。皆不舉行。所有本年班應來之東三省將軍、副都統、城守尉、總管、盛京五部侍郎、暨各省城將軍、都統、副都統、城守尉、熱河總管等。均毋庸來京陛見。俟明年年班。再行輪班陛見。【『宣宗實錄』卷 26 道光元年 11 月戊申(1 日)】

⁹ 筆者は、以前に「光緒初年盛京行政改革の財政的背景——東三省協餉の不足と盛京將軍の養廉確保の意図——」(『東洋學報』79-1, 1997 年, 75-103 頁)と題した小稿を発表したことがある。光緒年間初期、すなわち 19 世紀後半の盛京における財源不足の状況とその不足を補填すべく試みられた東三省協餉の確保計画とその動機・意図などを論じたものであるが、この中で、19 世紀半ばの盛京ではすでに財源不足が進んでいたことを指摘しておいた。本稿で紹介した各記事に記されている協餉の要求方法は、光緒年間初期の盛京將軍によるものとはほぼ同様であるように思われる。

¹⁰ 省略したその次の記事は以下の通り。

■58. 諭内閣、富俊奏、酌議雙城堡移駐京旗閒散章程一摺。朕詳加披閱。內出京時日、豫定準期一條。所奏是。嗣後京旗閒散有願赴雙城堡者。著各旗於十月內、報齊戶部具奏。十一月初、即知照順天府尹、直隸總督、盛京吉林將軍等處。定期於每年正月初五日以後、初十日以前啟行。該地方官即計程籌備。又治裝銀兩、改俟抵吉林後發給一條。所奏亦可。現在移駐京旗。大都無力覓工。嗣後將戶部應發銀兩。俟抵吉林後、由將軍衙門備用銀兩項下發給、作為覓雇工價之用。俾得全獲地利。其荒地五晌、亦可隨時墾種。又彈壓大臣改派年班一條。所奏可行。嗣後移駐京旗。即於東三省年班入覲之將軍、副都統、簡派數員、順帶彈壓。仍令各該地方官、備店隨同護送。又給予車輛、分段遞送一條。所奏甚為周詳。該閒散等行李無多。著計口給車、節次遞送。祇給例價、毋庸津貼車戶。旋時可以載貨。不致賠累。務令旗民無虧。地方無累。經久可行。又修葺住房、豫辦料物一條。所奏是。明年應修住房百所。著於本年冬間備料、即領銀豫辦。以省運費。其道光六年應蓋房木、亦著於本年冬間派員照例發給鹽菜銀兩往砍、以備明年河運。又沿途飯食、豫定成規一條。所奏周妥。嗣後移駐京旗。每日尖宿、著照現奏章程辦理。地方官不致藉口賠累。京旗等亦可不滋事端。其移駐京旗已滿百戶。著每站分三起行走。以免擁擠。該部知道。【『宣宗實錄』卷 69 道光 4 年 6 月壬寅(10 日)】

¹¹ ジハーンギール・ホージャの反乱については、例えば、佐口透『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』(吉川弘文館, 1963 年)の第七章(405-467 頁)、榎一雄『新疆の建省(二)——二十世紀の中央アジア——』(『近代中国』16, 1984 年, 36-69 頁)、片岡一忠『清朝新疆統治研究』(雄山閣, 1991 年)の第二章第一節(81-111 頁)、などをさしあたり参照されたい。また、本註の作成に際しては、井上裕正『魏源と『海国図志』編纂の経緯』(『奈良女子大学人間文化研究科年報』26, 2011 年)の記載も一部参考にした。この反乱は、清朝の新疆統治に抵抗したカシュガル・ホージャ家の末裔であるジハーンギール(張格爾, Jihāngīr)がホージャ政権の復興とカシュガルの奪還を意図して起こした反乱である。ジハーンギールは嘉慶 25(1820)年以降、新疆各地に小規模の侵入をおこない、道光 6(1826)年に聖戦を唱えてカシュガルなど四城を占拠し、トルコ系ムスリム(ウイグル人)らもその行動に呼応して大規模な反乱となった。清朝は伊犁將軍長齡を始めとする地方大官を派遣し、黒龍江・吉林・甘肅・四川の軍隊で対応に当たったが、翌年の道光 7(1827)年初頭にはカシュガルを回復し、同年末にはジハーンギールを逮捕、翌年北京で処刑した。このように、道光 7 年半ばにはほぼその勝敗が決し、その後は「東三省官兵」も含めた清軍の撤退策と、新疆の善後策が検討されることになったわけである。

¹² 省略したそれらの記事は以下の通り。■68. の記事を除き、いずれの記事も、カシュガルにおけるその反乱鎮圧に携わった「東三省官兵」の凱旋について述べているものである。

■68. 諭軍機大臣等、據奕額等奏、奉天旗民私造私藏鳥槍。請予限半年。令其赴官吳繳。覈給例價。勿使隱匿。其應備守禦鳥槍。報明地方官。發給執照。編號註冊。不准私造。所需收繳鳥槍例價銀兩。即由獲餘項下動支。覈實報銷。請飭吉林將軍一體遵辦等語。奉天所屬地方。近年流寓旗民人甚多。往往私藏鳥槍。越邊偷打牲畜。肆無忌憚。自應嚴行禁止。至各旗閒散壯丁。學習武備。是其本務。東三省近山居住旗人。向賴打牲為業。是以鳥槍一項。未經禁止。若因流民偷打牲畜。併將旗人所藏鳥槍。一概查繳。日久各旗壯丁。必不能學習鳥槍。皆成無用。豈不因噎廢食。所關匪細。何念不及此。應如何酌定章程辦理之處。著奕額、博啓圖等、會同妥議

具奏。奏到再降諭旨。將此各諭令知之。【『宣宗實錄』卷130 道光7年11月戊午(17日)】

■69. 諭軍機大臣等、昨據長齡等馳奏、張逆已於除夕生擒。檻送京師。派誠端、吉勒通阿、祥雲保、帶領吉林、黑龍江、官兵。押解前來。東三省官兵。已經全撤。哈喇阿無須再往軍營。著那彥成於何處接奉此旨。即傳知該都統會同誠端等、押解張逆來京。前據那彥成奏留吉勒通阿、赴喀什噶爾差委。現經張齡派令押解張逆。亦即令其來京。無庸再行帶往。現在逆首雖已就擒。其善後事宜。尚須妥為籌辦。本日已降旨。令長齡於交卸後作速來京。那彥成仍當過速前赴喀什噶爾。與長齡會晤。以便長齡將一切經手事件。面為交代。即帶揚威將軍印信。起程回京。該督與楊芳、武隆阿、務將應辦善後各事。妥協經理。以副委任。將此由八百里諭知那彥成。並諭長齡知之。【『宣宗實錄』卷132 道光8年正月癸亥(23日)】

■70. 諭內閣、回疆遠在西陲。徵調未易集事。前此逆裔張格爾入卡煽亂。各路官兵。應援不及。遂被該逆竊據四城。生靈遭其荼毒。甚至我大臣官兵、效命捐軀。慘罹鋒鏑。實為天討所必誅。自長齡等於上年二月間。督兵進剿。三戰皆捷。未及弔月。四城以次蕩平。固已大張國威。稍紓眾憤。惟逆黨雖就駢誅。而兇渠尚稽殲戮。是遺孽一日不除。則軍務一日不竣。屢經飭諭該將軍等。妥籌善後。仍一面設法擒渠。以期迅速肅功。昨長齡等露布馳奏。元惡生擒。從此邊徼又安。外夷驚服。宜修告功之典。用昭寅感之誠。本年孟夏時享太廟。及常雩方澤大祀。朕將躬展明禋。其飭所司。於祝冊內敬舉受釐宣捷之忱。用申虔告。恭惟盛京三陵。禮應親詣叩謝。惟念畿輔陪京地方。應付東三省凱撤官兵。尚未竣事。恐蹕路所經。重勞民力。宜先遣親王前往恭代行禮。東陵西陵。朕於九月間。敬詣展謁。仲秋恭祀社稷壇。亦當親詣將事。並著於祝文內敬載申悃。其應行禮儀。及此外一切典禮。各該衙門察例具奏。以次舉行。【『宣宗實錄』卷133 道光8年2月壬申(2日)】

■71. 諭內閣、吉林佐領色普青額、驍騎校扎隆阿、出征凱旋。沿途攜帶民人高孝、周景成、跟隨服役。雖訊係高孝等因貧難度。自願隨往。該員等不遵禁令。輒敢收留攜帶。本應照律治罪。惟念東三省官兵、此次遠赴回疆。甚為出力。現值大功告成。普沛恩施。亦應稍從寬貸。色普青額、扎隆阿、俱著加恩改為降一級調用。以示薄懲。【『宣宗實錄』卷133 道光8年2月壬午(12日)】

¹³ これ以降の時期から道光年間末までの記事のうち、本稿の本文中での分析を省略したものは以下の通り。各記事における主題や、「東三省」の語が用いられている文脈はそれぞれに異なっているが、■79.と■85.の記事において「東三省」の語をマンチュリアの地理的・空間的な枠組みとして用いているのを除けば、それ以外の記事はいずれも、人的集団を意味する語として「東三省」の語を用いている記事である。

■73. 癸亥。諭內閣、朕此次前往盛京。恭謁祖陵。已降旨於本月十九日啟鑾。著派定親王奕紹、大學士托津、尚書湯金鉞、明山、留京辦事。其月選之文員內佐雜等官。武職內八旗護軍校、驍騎校、及外省送到之驍校、並年滿千總等官弁。俱著留京王大臣照例驗放。其東三省補放水師等官。即就近於行在帶領引見。【『宣宗實錄』卷159 道光9年8月癸亥(2日)】

■74. 諭軍機大臣等、楊遇春等奏、委員出關。辦征征兵馬四料草一摺。前因徵調各路官兵乘駝馬匹。應需草料。會降旨令楊遇春等派委委員。先期購買。以備供支。茲據奏、此次徵調各路官兵。除伊犁烏魯木齊等處滿漢官兵業已經過。無庸供備外。所有調派京營東三省及陝甘滿洲營官兵四千五百名。四川綠營官兵六千名。陝甘綠營官兵二萬三百八十名。約計乘駝馬一萬七千四百六十餘匹。又調口內各營備戰馬五百四十匹。統共約馬一萬八千匹。自哈密迤西至阿克蘇止。計四十站。共應支進征官兵馬匹食料二萬一千六百石。十斤重草七十二萬束。自應趕緊採買。現經楊遇春等派員酌帶銀兩。前往托克遜、喀喇沙爾、庫車等城購辦。仍查照上屆成案。一面飛咨烏魯木齊都統成格、先行派員。就近前往各城備辦料草。俟關內委員到日。再行接辦。著楊遇春等妥速辦理。早日購買齊備。一俟大兵出口。俾得源源支應。無誤軍需。又另片奏、阿拉善王等供進驢駝二千隻。均已分起解往肅州軍需局查收。前令再辦駝一萬隻。恐所屬之地。採辦為艱。現又檄行福呢雅杭阿、轉飭伊克昭盟長、在鄂爾多斯貝子七旗地方。採辦壯健驢駝七八千隻。送交寧夏府點收轉解。並著如數籌備。迅速解往。無得遲誤。將此諭令知之。【『宣宗實錄』卷177 道光10年10月辛丑(17日)】

■76. 壬子。諭軍機大臣等、據孟魁奏、查閱關門。有大車一輛。車夫二名。男女六名口。於三月十一日行抵山海關。因有嵩惠畫押名單。次日查驗放行。東三省官員之眷屬僕婦車輛落後。留單驗放出關。向來事所常有。惟嵩惠究竟有無落後車輛。所留畫押名單一紙。著孟魁即行封咨嵩惠辨認。是否係其親筆。單內開載男女名口姓氏。是否係伊眷屬僕婦。因何行走落後。其中有無別情。著嵩惠據實明白覆奏。毋稍含混。將此各諭令知之。【『宣宗實錄』卷235 道光13年4月壬子(12日)】

■77. 諭內閣、前因惇親王綿愷、文慶、來園奏事。朕俱召見。據惇親王綿愷面陳。與禧恩等共商軍民人等薙髮停止宴會之處。於義未協。引用百姓如喪考妣。四海遏密八音之說。惇親王等既有此說。是以降旨再交大學士、軍機大臣、會同禮部詳查例案。悉心妥議具奏。茲據大學士長齡等會奏。朕詳加披閱。內稱乾隆十三年五月二十三日。奉皇祖高宗純皇帝諭旨。孝賢皇后大事。一切典禮。朕皆斟酌古今。務協其宜。蓋皇后體制原尊。然

以天子之禮視之。則節文亦自有別。縱令伉儷恩篤。亦不可事事從而加厚。以致失之太過。即或情誼稍有未洽。亦不宜事事從而貶抑。以致失之不及。朕於孝賢皇后情隆誼重。固天下臣民所共知。而經紀喪儀。從不肯以一毫私意。稍紊典常。考明代嘉靖七年。孝潔陳皇后之喪。閣臣張璠援據古禮。以為喪服自期以下。諸侯絕。特為旁期言。若喪妻本自三年報殺為期年。固未嘗絕。上宜為后服期等語。其折中頗為允當。今據大學士等議奏。禮儀內如升殿作樂一節。凡屬大朝祀典。自當照例。朕以今年內尋常升殿。但鳴鐘鼓。樂懸而不作。庶為合宜。至來年正月。將屆期年。一切典禮。著照康熙十四年之例如常儀。欽此。仰見聖諭煌煌。斟酌盡善。後世子孫。總當恪遵成憲。不敢以私意紊典常。是以朕前降諭旨。皇后喪儀。乾隆十三年皇祖妣孝賢純皇后大事。固不敢踰。嘉慶二年皇妣孝淑睿皇后大事。尤不敢過。與皇祖高宗純皇帝諭旨。不致失之太過。不致失之不及二語。實相符合。茲惇親王綿愷。引用百姓如喪考妣。四海遐邇八音之語。殊屬不倫。蔡沈集傳註云。遐絕。密靜也。八音。金石絲竹匏土革木也。言堯聖德廣大。恩澤隆厚。故四海之民思慕之深。至於如此也。儀禮。圻內之民。為天子齊衰三月。圻外之民無服。今應服三月者如喪考妣。應無服者遐邇八音。註意深切著明。豈惇親王等全未寓目。不加體察乎。況虞書二語。係指帝堯而言。並非指帝堯之后。不學無術。信口亂談。惟恭查乾隆十三年六月初九日奉旨。副都統海昌奏。熱河官兵接奉部文。副都統以下。官員以上。俱穿二十七日孝服。兵丁摘纓二十七日。俱過百日後薙髮。期年內停止宴會音樂。軍民人等。均著一月後薙髮。百日內停止宴會音樂。其在京旗人。著照乾隆十三年熱河兵丁之例。俟百日後薙髮。其餘東三省暨各省駐防。及京城外之寶坻縣滄州等處小八旗兵丁。俱仍著一月後薙髮。無庸更改。至惇親王綿愷來園具奏時。痛哭流涕。並奏稱四人共商。意見相同。妄加援引。朕若將伊等照大不敬律治罪。伊等自思能當此重咎乎。惇親王綿愷。福恩、文慶、裕誠、著交宗人府吏部嚴加議處。此係朕姑從寬典。僅予薄懲。將此通諭中外知之。【『宣宗實錄』卷 237 道光 13 年 5 月壬辰(22 日)】

■79. 諭內閣、寶興等奏、查辦山海關協領於該副都統奏後列款誣揭一案。分別定擬一摺。此案山海關協領六十一、托克通額、於該副都統奏後。輒敢列款誣揭。意圖抵制。且所揭各款內。惟指稱該副都統將和盛阿防禦違例擬正。情節為重。經寶興等逐層根究。尚無弊竇。審屬虛誣。自應按律加等問擬。六十一、托克通額、均著革去協領。發往軍臺效力贖罪。托克通額、雖據供母老丁單。不准留養。防禦德慶、訊無朋比謀缺情事。惟於犯案擬流折枷後。朦混起用。著革去防禦。照例發近邊充軍。折枷發落。防禦和盛阿、草創摺稿。經該副都統添改語句。尚非其罪。惟於伊弟和通阿挑取馬甲時。當眾叩謝。究屬不合。臨榆縣知縣蕭德宣、於修理關柵。未能如式。俱著交部照例議處。副都統孟魁雖無違例保送及挑甲受託情弊。惟所奏協領托克通額管轄廢弛。本年軍政考語。又填註事務謹慎管轄整肅字樣。且奏摺內。言過其實。復於教場挑缺之日。負氣摔牌。種種謬妄。著交部嚴加議處。餘俱著照所擬完結。所有臨榆縣南北水關木柵。飭令該縣趕緊修理完固。至東三省進貢車輛。著山海關副都統嗣後於貢車到關。務須查對印照。開載輛數。驗無夾帶私貨。方准進關。以杜弊混。又山海關佐領德克登額、於進關車輛等件。不能實力稽查。經該部議降四級調用。著加恩改為降四級留任。【『宣宗實錄』卷 247 道光 13 年 12 月丁巳(21 日)】

■81. 癸巳。諭內閣、前因高喀蘇以在京一品大員。內廷行走多年。輒以私信囑託公事。且有牽涉九卿戶兵二部代為通融等語。負恩膽大。自取罪戾。業經將伊並其二子一同革職。發往熱河充當苦差。以示懲儆。因思東三省暨西北兩路、以及各直省大員。與在廷諸臣書信往來。亦時有。其間干預公事。私相囑託。未經舉發者。實不能保其必無。在廷諸臣。於地方應辦緊要公事。如果確有把握。不妨據實奏聞。儘可採納。朕必立見施行。若以私書囑託公事。挾持地方官意在必行。玩法辜恩。莫此為甚。封疆大吏。均經朕特加擢用。自當各矢公忠。不避嫌怨。方為不負委任。嗣後儘有似此干預囑託。一經舉發。高喀蘇即其前車之鑒。地方大吏。儘受其囑託。或代為徇隱。不即據實奏參。別經發覺。一併執法嚴懲。決不寬貸。將此通諭中外知之。【『宣宗實錄』卷 285 道光 16 年 7 月癸巳(12 日)】

■84. 又諭、本日御前大臣等奏、乾清門二等侍衛開隆阿、請回本處侍奉父母一摺。東三省之人。向無侍親之例。惟開隆阿曾經西路軍營效力。賞給巴圖魯名號。自選用乾清門侍衛以來。當差甚好。著加恩飭回本處。遇有對品佐領缺出。即行補用。嗣後不得援以為例。【『宣宗實錄』卷 302 道光 17 年 10 月壬戌(18 日)】

■85. 內務府大臣奏、遵議逃走太監治罪章程。太監逃至河南山東山西及東三省。枷號一年。發往黑龍江給官員為奴。遇赦不赦。如逃至各省。即係越省遠颺。永遠枷號禁斃。另有案情。從重辦理。仍將容留之人治罪。如止逃回順天直隸本籍者。照舊例辦理。逃往別州縣。離本籍五百里以外。枷號六箇月。發往打牲烏拉給官員為奴。三年釋回。如復行逃走。即照逃往河南山東山西東三省之例治罪。從之。【『宣宗實錄』卷 302 道光 17 年 10 月戊辰(24 日)】

■86. 甲辰。諭內閣、值年旗大臣奏、揀選察哈爾總管。所有各旗蒙古侍衛章京內。並無通曉蒙古文字人員。請

旨一摺。此次揀選察哈爾總管。各旗蒙古既無通曉蒙古文字侍衛章京。即照從前辦過章程。於現在住京之東三省人員內。無論滿洲蒙古旗分。咨取通曉蒙古文字之頭等侍衛章京。及該處保送之雅理木丕勒等三人。一併揀選引見。【『宣宗實錄』卷351 道光21年4月甲辰(20日)】

¹⁴ その記事の全文は以下の通り。

■88. 上寅承寶祚。撫御寰區。荷上天篤眷之隆。嗣列聖昇平之盛。觀光揚烈。德盛化神。下際上蟠。超圖溢牒。溯自開闢上塞。寵被宸章。養正潛居。特蒙賜翰。允文允武。式彝訓而奉心傳。泊至親御神槍。奠安宗社。百靈翊相。恩賚益隆。駿烈豐功。實依古帝王所未有。用是山莊受璽。天與人歸。海寓嚮風。翕然思服。御極三十年。經緯萬端。貞釐百度。盛德大業。厚澤深仁。懿鑠哉。超出乎千百王之事功。融貫乎億兆人之心志。而凝固乎萬年有道之丕丕基。自生民以來僅觀之隆軌也。管蠡窺測。綜舉數端。一曰敬天。披旱澇之章。則勤思天戒。應和甘之兆。則寅感天恩。每值春祈夏雩圉丘方澤諸大祀。必躬必親。竭誠盡敬。禮成敬述之什。散見聖製者。類皆闡昭事之忱。肅明禋之典。至大雩步禱。親撰祝辭。省儉責己之懷。為民請命之意。至誠上籲。感召斯神。其或陽雨偶雩。齋心虔祝。祥霽甘澤。應念而來。惟天聰明。惟聖昭假。通微合漠。聖心即天心也。他若方社之薦馨。三壇之秩事。羣神百祀之加號頌題。典禮修明。粲然該備。胥本崇效率法之念。推而暨之。其在書曰。欽若昊天。有同揆焉。一曰法祖。二百年來。聖人代作。文謨武烈。垂裕無疆。晨興恭誦寶錄。隨事申論。身體力行。春秋祗謁東西陵。霜零露濡。悽愴瞻戀。內外宮殿寺宇。供奉神御之所。升薌展拜。無間歲時。至於寶錄聖訓之弁言。焜煌成史。聖德神功之貞石。炳煥橋山。是則以聖繼聖。即以聖闡聖。先後相契。若符節焉。迺率家法。謁祖陵。周覽陪都。省觀舊俗。瞻仰先朝弓劍鎧冑。以及茅茨土階之淳樸。櫛鐙角椅之流傳。憬然於開國艱難所自致。由是誼隆一本。篤念宗文。尊行則免其跽拜。懿親則肅其罽毼。錫章服。擢巍科。使知好修致福。教國語。習騎射。使知本業無荒。其翹秀者。量能授職。使自奮於功名。其蹶弛者。制檢立防。使不踰夫矩矱。記曰。尊祖故敬宗。敬宗故收族。胥此志也。國家重熙累洽。地大物阜。政務殷繁。一日二日萬幾。匪勘曷理。批答章奏。引對臣工。吁食宵衣。寒暑罔懈。法不貸於貴近。宗藩戚里。有過必懲。賞不遺於細微。伯克土司。無勞不錄。則紀綱所由飭也。名器不可濫。典臺敢僭衣冠。禁令不可干。宦寺務嚴關預。則法度所由貞也。興利之言必斥。而經費不得虛糜。災黎之賦可蠲。而正供不容虧短。則國計所由裕也。著成績者遷不次。而奔競宜防。清積案者敘從優。而稽延必究。則官方所由敘也。禮耆舊。旌忠節。風俗以厚焉。捕邪匪。禁匿託。人心以正焉。聽言最廣。而是非不能蒙。取人最寬。而功罪不相掩。西陲部落。報墾升科。則內地之無曠土可知。東省邊門。射牲肆武。則鄉邑之無游民可知。修河防者六。籌海運者二。率芟下隲。輓粟飛芻。指示周詳。機宜洞協。則克勤于邦之遠並神禹者如此。德惟善政。政在養民。每歲仲春。吉日維亥。舉耜田之典。修四推之儀。貴粟勸農。期與海內共轅大有。歲偶不登。蠲租賦寬徵限以蘇之。發倉穀設糜廠以濟之。甚則出內帑命大臣巡視以振之。國有大慶。輒免積逋。動至數百千萬無少悞。此博施之仁也。為之開水利課農桑以裕其源。為之謀生聚制節度以謹其流。服食之為害者有禁。而奇袤革矣。殷實之好義者有褒。而雍睦成矣。此既富之教也。秋肅慮囚。至詳且慎。一節可疑者立命覆鞫。一綫可原者即予緩勾。平反者必賞。深文者必罰。株連積壓者必黜。及至獄成而孚矣。猶恐囹圄之中。非刑肆虐。桁楊之下。鍛鍊成招。徹成提撕。無微不至。此好生之德也。溥天率土。一民一物。悉在涵濡亨育之中。甚至窮島細民。蛟蜃同族。梯航求市。萬里攸關。亦皆矜彼惻隱。同我覆載。則愛人為大之動合禮經者如此。稽古右文。昌明正學。闡雅頌典謨之蘊。屏風雲月露之辭。讀御製詩文各集。辟雍宣講。經筵發論。篋乎尚已。於養心殿四箴。見起居之謹。於養正圖六十什。見法戒之詳。於序一統志。見繼述之克虔。於序續通禮。見典章之咸秩。而諮謀深切。尤於跋養正四箴內三致意焉。他若檢齋識語。息兵罷役疏識語。偶然抒寫。無非聖功王道所見端。用是嘉惠士林。旁招俊乂。正科十舉。恩榜五開。慮荒蕪者或抑真才也。則申考官摻卷之論。慮詐偽者或冒巍科也。則增直省覆試之條。至於贈三公而易名。恩禮務周於舊學。陪兩廡而從祀。表章且及於昔賢。教澤旁流。土風丕振。煥乎文德之誕敷也。在昔軒轅到治。涿鹿勤師。鴻內中天。苗頑梗化。自來明盛之世。豈無弗率之徒。張格爾者。逆裔波羅泥都之遺孽也。挾其醜類。敢外生成。陷我名城。戕我大吏。帝乃震怒。命將徂征。師行萬里而人不勞。月奏三捷而兵不頓。遂以除夕。生縛元兇。銘功鐵蓋之山。獻馘羹街之上。於是告成太室。宣豫慈闈。勒石於成均。圖勳於紫閣。凡茲勝算。胥秉廟謨。其餘滇蜀之夷。楚粵之獠。齊晉之莠民。臺洋之逆匪。威弧所指。灌穴焚巢。蓋智勇得之天生。而南苑習勞。香山閱武。無日不討軍實而訓以有勇知方。故威震疊疊若斯之神也。然且謂小醜跳梁。法不得而寬。兵實不得已而用。渠魁既殄。脅從可矜。兵燹所經。良善宜恤。寬嚴交濟。懷德畏威。則又大易所稱神武而不殺者焉。夫以憲天念祖。宥密之德之盛若彼。康庶政。誠萬民。邇大文而恢皇武。經世之道之隆復若此。登三咸五。唐哉皇哉。而聖性之肫至。聖心之淳穆。聖量之淵沖。猶不翅是。粵自踐阼後。祇事文母。以天下養。問安視膳。日有常儀。以綺春園密邇宸居。朝夕便於定省。特加修葺。以奉慈愉。令節嘉辰。承歡娛志。時或六飛展駕。掖輦偕行。行殿之中。晨昏罔缺。六上徽稱。三行慶典。推恩錫羨。用

